

# JAAGAELD

日米エアフォース友好協会 Japan-America Air Force Goodwill Association 発行:日米エアフォース友好協会

〒 160-0002

東京都新宿区四谷坂町 9 番 7 号 ZEEKS 四谷坂町ビル 3F

編集: JAAGA 事務局 印刷: 東伸社

ホームページ: http://www.jaaga.jp/

# 令和7年度 JAAGA 総会開催 JAAGA Annual Convention held on May 13 `25



JAAGA President Marumo delivers an opening address

令和7年度 JAAGA 総会は、5月13日(火)15時より約1時間、金古理事の司会により開催された。審議に先立ち、令和6年度定期総会以降にご逝去された正会員4名のご冥福を祈り、全員で黙祷を捧げた。

続いて丸茂会長より「JAAGA は平成8年の設立から今年で29年目を迎え、日米両空軍種における信頼感の増進という目的に沿って、先輩方の成果を踏まえつつ活動して参り、令和6年度も概ね順調に事業は進捗したと考えている。今日は昨今の情勢を踏まえて令和7年度の事業についてご審議いただきたい。」旨の挨拶があった。

本総会は、正会員総数 247 名(当日現在)中、本総会 出席者 58 名、委任状提出者 150 名の計 208 名をもって、 会則の規定により総会成立要件を満たす旨の報告があり、 議案審議、報告事項の順に審議等が進められた。

議案審議は会則に基づき丸茂会長が議長を務め、第1号 議案「令和6年度事業報告」(増子企画理事)、第2号議案「令 和6年度収支決算報告及び会計監査報告」(宮本財務理事、 監査報告:小野監事))、第3号議案「令和7年度事業計画」 (増子理事)、第4号議案「令和7年度予算案」(平元財務 理事)及び第5号議案「役員の選任」(議長)の5つの議 案について、各々担当理事による説明ののち質疑応答が行 われ、全議案について提示案のとおり承認された。

第3号議案では、日米隊員の激励等について、これまで 実施してきたコープ・ノースのほか、臨機に計画される二 国間、他国間共同訓練を対象に加える旨の説明があった。

第4号議案では、創立30周年記念行事に向けた予算について、令和7年度は準備に取掛かることから15万円を事業費として、15万円を積立金として計上している旨の説明があった。

第5号議案では、会長は丸茂氏、副会長は前原氏、荒木(淳) 氏、井筒氏、監事は小野氏、深澤氏がそれぞれ継続して選 任された。

質疑応答等の概略は次のとおり:第3号議案での意見として、米国では現在「クリスマス・カード」という言葉は使用せず「Season's Greetings」というのが一般的である旨の指摘があり、そのように修正することとなった。同じく第3号議案で指摘のあった正会員獲得の促進に対しては、

## ~ だより 第68号 目次 ~

令和7年度JAAGA総会開催・・・・・・・・・1	米空軍コーナー・・・・・・・・・・・・26
J A A G A 懇親会・・・・・・・・・・2	Local topics · · · · · · · · · · · · · · · 27
J A A G A 講演会・・・・・・・・・・・・4	投稿募集のご案内・・・・・・・・29
空幕部長等講演及びJAAGA訪米成果報告会・・・・7	JAAGAグッズの紹介・・・・・・・・29
令和6年度日米優秀隊員表彰・・・・・・・11	JAAGA事業計画・・・・・・・・・・・30
米空軍将校航空自衛隊勤務だより・・・・・・・15	令和 7 年度 JAAGA 役員・・・・・・・・・30
令和6年度JAAGA三沢基地等研修・・・・・・17	退任役員・新人会員紹介・・・・・・・31
航空宇宙群紹介コーナー・・・・・・・・・22	賛助会員の皆様へ・・・・・・・31
SPORTEX24 · · · · · · · · · · · 23	会員募集・・・・・・・・・32
航空自衛隊コーナー・・・・・・・・・・・25	編 集 後 記・・・・・・・・・・32

以前に比して OB が活動しにくくなっている現状もあるが 引き続き努力していく旨、また海兵隊航空隊との関係構築 の是非に対しては、ご指摘の点を念頭に置きつつ JAAGA としての活動を行う旨、それぞれ会長より回答があった。

次に報告事項として、武藤理事長より、役員会で選任された新任理事(伊藤顕氏、加藤文彦氏の計2名)の就任に

ついて報告された。最後に、退任顧問(岩崎茂氏、小野田 治氏、山崎剛美氏、平田英彦氏、石野次男氏、福井正明氏、 清藤勝則氏)、退任理事(深瀬尚久氏、三谷直人氏、高橋 秀雄氏)の紹介が行われ、総会が締めくくられた。

(菅原理事記)

# 令和7年度JAAGA 懇親会

JAAGA Annual Reception held on May 13'25

総会及び講演会終了後の18時15分から、内倉浩 昭空幕長ご夫妻、森田雄博支援集団司令官ご夫妻、小 笠原卓人空幕副長ご夫妻、影浦誠樹総隊副司令官ご夫 妻、小島隆航空開発実験集団司令官ご夫妻、船倉慶太 幹部学校長、坂梨弘明装備庁装備官、上田順一連合准 曹会会長ご夫妻、田崎剛広空幕総務部長ご夫妻、尾山 正樹空幕人教部長ご夫妻、久保田隆博裕空幕防衛部長、 徳重広為智空幕運情部長、藤永国博空幕装計部長、菅 井裕之装備開発官ご夫妻、金野浩子幹部学校副校長、 米空軍よりシャティー第5空軍副司令官ご夫妻、ロッ シュ幕僚長ご夫妻、各部長ご夫妻、第374空輸航空団 マックエルハニー司令官、ハウク最上級曹長及びオカ モト大佐、佐藤正久参議院議員、田母神俊雄元空幕長、 齋藤治和元空幕長、片山隆仁つばさ会副会長、中尾剛 久 JANAFA 副会長ほか、例年より多くの来賓の方々を お迎えし、川波理事の司会進行により盛大に懇親会が 開催された。

日米国歌 の吹奏の後、 丸茂会長よ りジョーク を交えつつ、 「周辺の安全 保障環境が



厳しさを増す中、日米同盟の重要性は一層増している。 経済と安全保障は切り離して議論すべきと言われる が、安全保障は両国にとって最も基本となる重要な国 益であり、今この時間も日米の隊員達が汗を流してく れている。このことが抑止力、対処力を高めて地域の 安全に貢献している。今年3月、自衛隊に常設統合司 令部が発足し、在日米軍司令部も統合作戦司令部に格 上げする事業が続いている。JAAGA は日米両空軍及び 宇宙軍を引き続き支援していく」旨の挨拶があり、続 いて丸茂会長より令和6年度に表彰を受けた日米の優 秀隊員が壇上で紹介された。

次に来賓の内倉空幕長より祝辞をいただいた。「三



点お礼を述べたい。一点目は
JAAGAによる日
米両空軍種、そして地域の橋渡し役としての貢献について、とりわけ
JAAGAの訪米成

果報告には圧倒されている。二点目は下士官同士の強い繋がりに対する支援、協力について、特にスペシャル・オリンピックスは素晴らしい機会と多様性に対する理解の促進を提供して頂いている。三点目は、配偶者の支援、これがなければ我々の任務は達成できない。先週イタリアにてお会いしたシュナイダー大将は『北朝鮮及び中露の協力は互いの利便性によるもの、一方日米関係は相互信頼によるもの』、ソルツマン大将は『宇宙オペレーションはチームスポーツであり、我々の目的を達成するために互いの役割を果たすよう努力する必要がある』と述べていたことを紹介したい。最後に在日米軍の『今夜の戦いに備えよう』を素晴らしいモットーとして紹介する」と述べられた。

来賓紹介に続いて佐藤参議院議員より、「丸茂会長 は防大同期。防衛予算について NATO は GDP5% に舵

を切りそうであり、日本も3%にして良いのではと思っている。政治サイドからもしっかりと応援したい」旨の挨拶があった。

佐藤議員及び稲月西



空司令官からの祝電紹介、そして歓談の時間となり、 大盛会のうちに前原副会長の閉会挨拶及び納杯をもっ て懇親会はお開きとなった。 (菅原理事

記)







Air Defense Command WO KATANO Tomoo



374th Airlift Wing SSgt Dhruv Singh



Space Operations Group SSgt TAMAI Chihiro





35th Fighter Wing

3rd Air Wing MSgt MARUHASHI Jin



9th Air Wing MSgt OKUZONO Shinji



A commemorative photo with JAAGA award winners

# 令和7年度JAAGA講演会 「共に強く ~1年の振り返りと未来への展望~

JAAGA Lecture held on May 13'25

今回の JAAGA 主催講演会は,第5空軍副司令官のジョン・シャティー准将 (Brig Gen JOHN M. SCHUTTE, Deputy Commander, Fifth Air Force) が「共に強く~一年の振り返りと未来への展望~」との演題で実施された。初めに、司会の 上ノ谷理事から、第5空軍副司令官及び太平洋空軍統合航空調整所長であるシャティー准将は、C-130輸送機など1,600 時間の飛行時間を有している中級航空士であり、1999年にバージニア大学の予備役将校訓練課程を経て空軍に任官し、 欧州、国防総省(ペンタゴン)、太平洋空軍、中央軍等での勤務経験があり、さらには4つの大学院レベルの学位を取得し、 現在はプリンストン大学にて高級行政・国際関係学の博士候補生であることが紹介された。また、前職はドイツ連邦共和 国にて米欧州軍司令部の副参謀長として活躍されていたことに加え、2008年11月から2011年7月までの間、横田基 地の第374空輸航空団において、C-130輸送機のチーフ・ナビゲーターとして勤務されていたことも付け加えられた。

シャティー准将は、講演の冒頭、JAAGA 会員に講演できることを大変光栄に思うと述べられとともに、自身と家族の 日本との長年の関係に触れその絆の強さを強調した。

その後、日本周辺の安全保障環境を最近の事象を紹介しながら俯瞰するとともに、この一年間の米空軍と航空自衛隊が 共に達成した事象について、在日米宇宙軍の設立、指揮統制構造の近代化及び演習等を通じたさらなる同盟関係の強化な どを例示し、その成果を強調するとともに、将来に向かっての様々な取り組みにも言及し、参加者からの万雷の拍手をもっ て、講演は終了した。講演後、丸茂会長はシャティー准将への謝意と JAAGA の支援を引き続き実施していく決意を示し、 講演会は終了した。

ご列席の皆様、こんにちは。まず、本日この素晴らしい イベントを主催し、私に講演の機会を下さった JAAGA に 感謝申し上げます。

5 空軍司令官兼ね て在日米軍司令官 ジョスト中将は、今 日参加できるのを大 変楽しみにされてい たのですが、出張と 重なり参加できなく なりとても残念と申 しておりました。代 わりに、私がご挨拶



Brig Gen JOHN M. SCHUTTE, Deputy Commander, 5th AF

させて頂く機会を頂き、感謝しております。

そして本日は、JAAGA 会員の皆様や自衛隊の方々と共に この場にお集まり頂けたことを、心から光栄に思います。

1996年の設立以来、JAAGA は、士気向上、相互信頼関 係の深化、そして安全で繁栄したインド太平洋地域の実現 に向けた協力関係を通じ、現役の自衛隊員と米空軍兵への 支援においてとても重要な役割を果たして下さいました。

これまでのご尽力に心より感謝申し上げますと共に、今 後も更なる日米同盟の強化に向けたご尽力に期待しており ます。

私は、今回このスピーチの準備をするにあたり、自身の 経験を振り返りながら、私と私の家族がどれほど日米同盟 によって形作られてきたかを実感しました。私の祖父は、 日米安全保障条約が発効してからわずか1年後に、空軍下 士官兵として来日し約1年勤務しました。帰国後、彼は日 本勤務中に米国で生まれた10か月の息子、すなわち私の 父の顔を初めて見る事が出来ました。

私の父は、祖父の日本勤務時の経験談に深い影響を受け ました。若い頃、父は日立と取引のある小さなアメリカの エンジニアリング会社に勤めており、活気あふれる1980 年代、東京や大阪へ頻繁に出張していました。

私自身の日本とのつながりは、同時期に始まりました。 私が10歳のとき父は都心で自分のアトリエを持つ女性芸 術家と出会い、恋に落ちました。ショウコは、世界有数の 大都市・東京からインディアナ州のトウモロコシ畑のど真 ん中に移り住み、父と2人の息子とともに新しい生活を始 めました。これこそ、真実の愛の証ではないでしょうか。

一方、私の義母も私の人生に大きな影響を与えました。 横田基地に大尉として勤務していた当時、私達夫婦は、日 本の豊かな文化と航空自衛隊の素晴らしい能力に魅了され ました。長男は16年近く前に横田基地で生まれ、私たち の家族は同盟国日本との長きにわたり切っても切れない絆 を継承しています。

業務面では、横田基地での最初の勤務期間中、2011年 3月に発生した東日本大震災が、私にとって大きな経験と なりました。この困難な時期に、日米両国が示した協力と 努力の覚悟に、私は大きな感銘を受けました。

さて、トモダチ作戦以来、この地域では多くの変化がありました。インド太平洋地域の安全保障環境は、これまで以上に互いに関係しあい、不安定になってきています。ロシア、北朝鮮、中国などの地域的な侵略国等が、世界秩序の再構築を目指しています。

これらの国の中で、特に中国は国際秩序を再編する意図 と、その能力を備えた最も強力な敵対勢力です。中国共産 党による持続的な投資の拡大は、人民解放軍を統合、ハイ テク、ネットワーク中心の軍事力へと変革させる軍事近代

化プログラムを 支えてきました。 さらに、2025 年の軍事予算は 2450億ドルを超 える水準に増額 させると公に表 明しています。こ れは2024年比7.



A large audience is listening

2%の増加であり、米国に次ぐ世界第2位の軍事予算となります。推計では、中国の実際の防衛支出は、公表された防衛予算を40%から90%上回るとされています。

中国は日本を含む諸外国に対する攻撃的な行動をエスカレートさせ、地域の安定と国際規範に挑戦し続けている状況が続いています。中国海警局の船舶は、日本の尖閣諸島周辺での活動を強化し、2024年には255日間にわたり巡回を実施し、この傾向は2025年の現在も継続しています。2024年8月には、中国軍のY-9偵察機が長崎県男女群島付近の日本領空を侵犯、中国軍機による初の領空侵犯が確認されました。

そして最近、尖閣諸島付近の日本領海内にある船舶から、中国海警局のヘリコプターが離陸し、約15分間、日本の領空に侵入しました。これらの行動は、中国による威圧と領土侵略という包括的な戦略を反映しており、日本の国家安全保障および自由で繁栄したインド太平洋地域に重大な課題をもたらしています。

残念ながら、地域のルール変更を目指しているのは中国だけではありません。中国、ロシア及び北朝鮮の3カ国間の協力強化の兆候も見られ、日本に対する安全保障上の懸念が高まっています。ロシアは日本周辺で中国と合同の海軍・空軍演習を実施し、軍事連携の強化をアピールしました。ロシアは、領有権を主張する北方領土の防衛を強化し、新型ミサイルシステムを配備し、兵力を増強しています。北朝鮮は、ウクライナ戦争で戦うロシアに対し、砲弾、軍事装備、さらには兵士を供給し続けています。北朝鮮は核開発に関する強硬な弁論をエスカレートさせ、先週金曜日には日本海に弾道ミサイルを発射しました。

これらの課題に直面する中、特に日米同盟は、この地域における強さと安定の象徴として存在しています。米軍と自衛隊の総合的戦力と協力関係は、敵対勢力に対して抑止力と決意を明確に示しています。

この1年、我々は日米同盟の強化等において大きな進歩を遂げました。昨年のJAAGA総会からの1年間、米空軍と航空自衛隊が共に達成した歴史的な成果のいくつかを簡単に振り返ります。

まず、昨年12月、横田基地に在日米宇宙軍が設立されたことは、宇宙を重要な戦闘領域と認識する日米防衛協力の画期的な拡大を意味します。中国やロシアなどの敵対国は、衛星を危険にさらす対宇宙能力を開発、実戦配備しており、世界各国や企業が運用する衛星、そして、我々全員が依存している重要な通信等に関するシステムに脅威をもたらしています。我々は航空自衛隊との協力を深化させ、通信、航法、ミサイル警戒など衛星に依存する能力が安全かつリジリエンスである事を保証します。

第二に、我々は昨年の2+2での合意事項を迅速に実行しており、パパロ米インド太平洋軍司令官の指示に従い、指揮統制構造の近代化に取り組んでいます。この取り組みの一環として、在日米軍と5空軍を分離します。この分離により、各司令部は透明性、柔軟性、明確な目的意識を持って行動できるようになり、平時の備えを強化することができます。日本のJJOC 設立に合わせ在日米軍司令部はJJOC協力支援チームを設立し、戦略レベルでの共同を推進しています。

5 空軍は、作戦運用可能な司令部としての機能も大幅に 強化しています。ミッションコマンド能力の強化と新たな 部隊配置構想の導入により、より機敏で回復力のある組織 へと変貌を遂げようとしています。分散型作戦への移行と 航空自衛隊との共同は、日本の防衛戦略の進化に直結し、 競争が激化する環境における抑止力を強化しています。

第三に、キーンソード、フリーダムエッジ、コープノー ス等の主要な演習を通じて、協力関係を加速しています。 これらの演習はいずれも、相互運用性、能力、戦術レベ

ルの卓越性を示す重要な機会となっています。これらの演習は、現実的で複雑な状況下で航空自衛隊と協力する能力を強化するとともに、我々が協力することで、さらに強くなるという明確なメッセージを発信しています。

これらの大模な演習に



JAAGA president expresses gratitude

加え、ジョスト中将は、成功に不可欠な小規模で焦点を絞っ

た訓練にも力を入れてきました。これらの取り組みは、戦闘支援作戦の全領域にわたる二国間での実践的な訓練を通じて、分野の専門家を育成することを目的としています。 飛行場損傷の修復や、空中警戒管制システムから警備部隊の運用まで、これらの焦点を絞った交流は、現場での能力を向上させ、米空軍と航空自衛隊のカウンターパート部隊どうしの関係を強化し、我々の準備態勢を強化します。

過去1年間で最も象徴的な瞬間の一つは、9月に爆撃機任務部隊作戦の一環として、航空自衛隊のF-35戦闘機が米空軍のB-2爆撃機と編隊飛行を行ったことです。これは歴史上初めてのことであり、単なる能力のみではなく、戦略レベルでの信頼と相互運用性を示しました。この信頼関係を更に強化するため、現在三沢基地にはB-1爆撃機が展開しています。米空軍爆撃機の日本への展開は約50年ぶりのことであり、担任区域全体に、強固な同盟関係を示す明確なメッセージを発信しています。

これらの成果は、5 空軍にとってのマイルストーンだけではありません。日米同盟にとってのマイルストーンであり、地域の平和と安全に対するゆるぎない決意を反映したものです。

これらの成果を振り返るにあたり、我々は明確に将来を 視野に入れています。今後、5 空軍は、これまで以上に統 合化、機動力、回復力を高めた将来の作戦に焦点を当て、 前進を続けてまいります。日本、同盟国及び地域のパート ナー国と協力し、ダイナミックな部隊運用、高度な共同訓 練、最先端の能力の準備を進め、準備万端の態勢を維持し てまいります。

今後の道筋を計画するにあたり、在日米軍司令部と第5空軍の役割を継続的に進化させる変革は今後も我々のビジョンの中心となります。在日米軍司令部が、戦域全体の統合と戦略的調整に重点を置き、5空軍が高烈度作戦の実行能力を強化することで、より迅速で決定的な能力の基盤を築いています。新たな5空軍の運用開始は、日本の航空防衛を強化し、航空自衛隊との共同を深め、紛争の全段階にわたる航空作戦を実施するために必要な運用柔軟性を確保する重要な機会です。

今年7月に開催予定の「レゾリュート・フォース・パシフィック (REFORPAC)」や、「キーン・エッジ」をはじめとする今後の演習は、日本の防衛に関する我々の共通のビジョンを実践する最強な機会です。航空自衛隊の皆様、REFORPAC の実施に向け、ご支援とご参加に感謝申し上げます。あらゆる事態に対応できる強固な指揮統制ネットワークの構築に向け、お互いに、学び合いながら関係を強化できることを楽しみにしています。REFORPAC のような演習は、分散型で生存性が高く、戦域全体で機動可能な部隊を構築するためのものです。REFORPAC 演習を通じて、

我々は、航空自衛隊、同盟国と共に ACE (機敏な戦力展開) 作戦能力を強化しています。

指揮統制機能を近代化し、多国間演習を通じてその機能を検証し、我々は民間業界との、より深い連携も追求しなければなりません。特に、ハイレベルな物流、無人システム、指揮統制の統合、宇宙を基盤とした能力などの分野において連携が必要です。民間業界は、スピード、イノベーション、技術的優位性をもたらします。そして、ここ日本国内での協力には大きな可能性があると思います。

共に変革し、防衛と調整するとは、将の課題には、将の課題に対応するためだけでなく、平洋地域の防空を、共同記ででは、共同記述では、共同に対している。



JAAGA president expressed gratitude

力を構築しています。

現在まで、そして今後予想される我々が直面する変化を 通じて、一つだけ変わらないことがあります。我々の同盟 の強さは、装備品、システムだけでなく、我々が築き上げ た関係、維持してきた信頼、そして共に機会を追求する事 によって決まるということです。

その精神に基づき、我々は、JAAGAがコミュニティ、防衛専門家をつなぐ上で果たす独自の役割を深く評価しています。地方自治体や産業界との信頼と長年にわたる関係は、我々の共通目標に対する相互理解を推進するうえで、非常に重要な役割を果たしています。この支援は、航空自衛隊の民間飛行場へのアクセス拡大の機会を探るうえで、特に意味のあるものとなるでしょう。この取り組みは、作戦の柔軟性を高め、日本の防衛体制全体を強化するものです。

5 空軍は、状況が整い次第、航空自衛隊の後を追う形で それら日本国内の飛行場へのアクセスを増やし、作戦の柔 軟性を拡大する準備を整えていると、ジョスト中将は明確 に意思表示しました。こうした中で、皆様の支援、関与は、 継続的な対話と共通の進展に大いに役立ちます。

共に、適応力があり持続可能で、相互尊重の精神に深く 根ざした同盟関係を築いていきましょう。ジョスト中将及 び日本防衛に献身する5空軍所属の2万を超える空軍兵、 シビリアン、日本人従業員を代表し、皆様と共にこの道を 歩み、課題に挑みチャンスをつかみ、先人達の犠牲の上に 成り立つ新たな未来を築いていけることを光栄に思いま す。継続的な友情、支援、そして日米同盟への献身に対し、 改めて感謝申し上げます。どうもありがとうございました。

# 空幕部長講演会

## Lecture for JAAGA members on Feb 12`25

令和7年2月12日(水)、グランドヒル市ケ谷において、航空幕僚監部装備計画部長藤永国博空将補を講師に迎え、「航空自衛隊の後方基盤強化について考える」と題して約2時間の講演会が行われ、我が国内外の安全保障環境を俯瞰した上で、抜本的強化における後方の課題及び後方基盤強化に向けた今後について、個人的見解を含むとした上で1時間半を超える熱のこもった講演及び多くの質疑応答が行われた。

また、講演に先立って前号「JAAGA だより 67 号」に掲載された「令和 6 年度つばさ会/ JAAGA 訪米団成果報告」について引田理事による説明が 40 分間実施された。参加者は、JAAGA 会員 57 名(正会員 37 名、法人賛助会員 17 名、個人・団体賛助会員 3 名)であった。 (菅原理事記)

## 講演「航空自衛隊の後方基盤強化について考える」

航空幕僚監部 装備計画部長 藤永 国博 空将補

藤永空将補プロフィール

統一94 幹候(松山大) 職種:航空機整備 主要経歷 空幕教育課長、 幹部候補生学校長、第2 補給処長、第5航空団司令、 空幕装備計画部長(令和6 年3月~)



## 1 我が国周辺の安全保障環境

内閣府調査によると日本が戦争に巻き込まれる危険に対する国民 認識は 1969 年の 52%から 2023 年は 86.2%と大幅に上昇した。 10 人中 8  $\sim$  9 人がその恐れがあると認識していることになる。

インド太平洋地域は安全保障上の課題が多い地域である。中国は東シナ海における現状変更の試みや活動が急速に拡大・活発化している。また、台湾や南シナ海をめぐる問題、活発な日本海及び太平洋への進出などが行われている。ロシアとは北方領土問題もあり、昨年9月、IL-38が礼文島付近で領空侵犯して空自初のフレア発射による対応を行った。

一方、国際社会では、ロシアによるウクライナ侵攻、イスラエルと ハマスの戦争、韓国大統領による戒厳令発令など、国際社会は戦後最 大の試練の時を迎え、新たな危機の時代に突入している中、我が国は、 戦後最も厳しく複雑な安全保障環境に直面している。

## 2 戦略環境の変化と戦略三文書

2022年9月、ロシアのウクライナ侵略から約半年後の国連総会にて岸田元首相は「力による支配(Rule by Force)から脱却し、国際法を誠実に順守して法の支配(Rule of Law)を追求する、力や威圧により領土や地域の現状変更を企図する如何なる行為も許さない、国連憲章の原則の侵害に対する重大な違反に対して各国が協力する」旨を述べ、この年の12月に戦略三文書が策定された。

国家防衛戦略における防衛上の課題として、①ウクライナがロシアによる侵略を抑止する十分な能力を保有していなかったこと、②ロシアのような国から自国を守るためには、力による一方的な現状変更は困難であると認識させる抑止力が必要であり、相手の能力に着目した防衛力を構築する必要があること、③周辺国などが軍事力を増強しつ

つ軍事活動を活発化させるなか、我が国はこうした動きの最前線に位置していること、④飽和攻撃、認知戦、宇宙・サイバー・電磁波領域の戦い、AI、核による威嚇等、新しい戦い方が顕在化するなか、それに対応できるかどうかが今後の防衛力を構築する上での課題であることが挙げられている。

我が国の防衛の基本方針として、「3つの防衛目標」及び「防衛目標を達成するための3つのアプローチ」:①我が国自身の防衛体制の強化、②日米同盟による抑止力と対処力の強化、③同志国等との連携の強化、が示されている。

防衛力の抜本的強化に係る7つの柱のうち、後方の視点で観ると「持続性・強靭性」や「機動展開能力」等が特に関係するものと言える。こうした防衛力強化のための予算は、31中期防では歳出ベースで27.5兆円であったのに対し、防衛力整備計画では43兆円と大幅に増額されている。

空自後方が達成すべき目標としては、将来にわたり我が国を守り抜く上で自衛隊の継戦能力(弾薬、燃料、装備品の可動数)は必ずしも十分ではない、という認識のもと、また有事において自衛隊が粘り強く活動でき、実効的な抑止力となるよう、十分な継戦能力の確保・維持を図ることとしている。具体的には、2027年度までに弾薬は必要数量が不足している状況を解消、火薬庫を増設、装備品の部品不足を解消して、計画整備等以外の装備品が全て可動する体制を確保する。おおむね10年後の2032年度までに、弾薬は適正な在庫の確保を維持、火薬庫の増設を完了、装備品は部品の適正な在庫の確保を維持、火薬庫の増設を完了、装備品は部品の適正な在庫の確保を維持する、としている。一方で、可動機を確保するだけでは十分ではなく、戦闘損耗への対応や被害を受けた後の継戦能力の確保、物資の補給・輸送等の持続可能性についても考えていく必要がある。

自国での装備品の開発・生産・調達を安定的に確保し、新しい戦い方に必要な先端技術を防衛装備品に取り込むために不可欠な基盤=防衛生産・技術基盤は、国家防衛戦略において「いわば防衛力そのもの」と位置づけられ、その強化は必要不可欠と記述されており、新たな戦い方に必要な力強く持続可能な防衛産業の構築、様々なリスクへの対処、販路の拡大等に取り組む必要がある。国家防衛戦略には新たに、防衛生産基盤の強化、防衛技術基盤の強化、防衛装備移転の推進の三つの取り組みが個別具体的に明記され、空自も各々の施策について防衛装備庁と連携しているところである。

#### 3 抜本的強化における後方の課題

「素人は戦略を語り、プロはロジスティクスを語る」という古い格言がある。ロジスティクスが最も重要というわけではないが、ロジスティクスなくして作戦は遂行できないということだと思っている。ロジスティクスの限界が作戦の限界となる現実に鑑みると、後方が更に重要になるものと考えている。

#### ①人材確保の課題

人口減少を見据えた組織の最適化・効率化は必須である。自衛隊の 定員と現員の状況を見ると、特に空士の充足率が低調である。航空専 門学校の整備コースの入学者数が最近7年間で半数に減少している という報道もある。

#### ②予算執行上の課題

令和5年から予算が急激に上昇し、令和7年度の概算要求額は約8 兆5千億円となっている。それまで目に見える正面装備を揃えるこ とが大事だとされていたが、現在は装備品を充実させつつしっかり維 持していく、言わば車の両輪で進んでいる。令和7年度予算案を含 むこれまでの防衛力整備計画期間における契約ベースの空自予算は、 31 中期期間に比べ年度平均で比較すると約2.3 倍に増加し、旧正面 が約2.4倍、旧後方は約2.2倍となっている。予算倍増の一方で、会 社ごとに契約をまとめる等の努力により契約件数は倍増とはなって いないが、中央調達の契約件数は約1.5倍で金額は2.9倍、地方調達 は約1.2倍で金額は約2倍となっている。仕事は増えても人は増え ず、また働き方改革への対応もあり、いかに効率的に予算執行してい くかが課題である。最近は一般輸入 /FMS による取得装備品が増え予 算額が高い状況で推移しており、特に「抜本的強化」が始まった令和 5 年度以降の FMS は 31 中期に比して約 2.2 倍、一般輸入は約 3.6 倍 に増加している。ただ、防衛力整備計画策定時のレートは 108 円だっ たのに対し令和7年度は150円になっていて、特に輸入装備品が多 い空自の特性もあり、当初計画どおりに要求できない状況となってい ることも課題である。また件数の増加とともに一般輸入の契約解除の 倍増や、FMS 調達は納期が設定されていないことから計画どおりに 入手できないことも多く、大きな問題と認識している。

## ③機能回復上の課題

非可動装備品の早期解消や可動率の向上については、粘り強く戦う ための課題である。維持整備費について、26中期防(2014-18)の 約3,700億円と31中期防(2019-22)の約4,800億円に比べ、この 3か年の防衛力整備計画(2023-25)は1兆円を超えている。これに より部品不足による非可動を解消し、保有装備品の可動数を最大化し、 部隊能力の維持向上を図る。また、十分な部品の確保や確実な整備を 行う経費を確保し、2027年までの目標、即ち計画整備等以外の装備 品が最大可動する態勢を確保する。しかしながら、特に航空機部品は 3~4国が多く、コロナや国際情勢による国際的なサプライチェーン の停滞もあってリードタイムが長期化傾向にあり、一朝一夕に解決す ることは困難となっている。保有資産(航空機と施設以外の装備品) と維持整備費のバランスについて、防衛力整備計画策定前は、保有資 産全体が十年間で 7.9 兆円から 9.1 兆円へ約 15% 増加しているのに 対し、保有資産に対する維持整備費の割合はほぼ横ばいで推移し、バ ランスが崩れていた。防衛力整備計画では、維持整備費の割合が約5% 増加したが、主要装備品の取得と取得した装備品の維持整備費のバラ ンスをとることが、後方の機能回復上の課題と捉えている。

## ④粘り強く戦うための課題

近年スマート倉庫による省人化、大規模及び集中保管による効率的な保管環境の整備が進んでいるが、保管に係る抗たん性の確保とは二律背反となる。抗たん性確保には分散保管しなくてはならず、分散保管すると効率性が損なわれるため、これをどうしていくかも課題と認

識している。また、昨年から航空燃料不足の問題があり、所管省庁に て対応が検討されていることはご存知のことと思う。特に、近年カー ボン・ニュートラルなどの影響で国内製油能力が低下しているほか、 ドライバー不足も様々な面で影響してくる。基地外での燃料の保管、 有事における民需燃料との割り当ての調整制度、厳しいペナルティ要 件や比較的少ない調達量等の官側との契約・調達の問題、燃料輸送能 力の不足や有事における民間輸送の可能性といったものが課題と認識 している。現在、空自輸送所要の約6割を民間に委託している状況 であり、平時は不足分を民間輸送力で補えるが、有事にどこまで民間 輸送力に期待できるのかが問題と認識している。今後の機動分散運用 も踏まえると、空自の輸送能力を一層強化していくことも必要だと考 えている。航空基地は攻撃対象となることから、機動分散運用基盤の 構築が必須である。米軍の ACE (Agile Combat Employment) は、先 行的な展開及び迅速な再展開により戦闘力を確保しつつ回復力・残存 性を向上する考え方であり、こうした運用を参考にして検討している。 また空自における補給処整備は基本的に民間企業との契約行為に基づ いて行われているが、迅速性には限界がある。一方、米空軍は工廠を

保有しており、命令により 24時間シフト制で整備作業 が行われるシステムとなっ ているため、日本に比して 維持整備上のスピードと対 応の柔軟性が異なる。



## ⑤防衛生産技術基盤の課題

昨年11月、重工3社の防衛事業売上収益は25%増収の1兆5,110億円、防衛予算拡大への期待から市場は注目、という報道があった。一方で、防衛産業は停滞期間が長く続きサプライチェーンが弱体化しているのが現状、人手不足も課題、との報道もあった。民間調査によると最近10年で防衛関連企業は減少傾向にあり、2013年からの10年で全体では173社減小、中小企業では約1割の減少となっている。これは防衛部門の売上比率が低いこと、市場が限定されていること、少量多種の開発・生産、レピュテーション・リスクなどが影響しているものと考えられるが、如何にしてサプライチェーンを再生し、強化していくかが課題だと認識している。

## 4 後方基盤強化に向けて

「改革を加速せよ、さもなければ敗北する」はブラウン統参議長(当時)の米空軍参謀長時代からのモットーであるが、我々もこうした危機意識をもって以下の改革に取り組んでいく必要があると考えている。空自後方の将来ビジョンとしては、補給本部等においては AI等の先端技術を活用した補給処機能の集約、維持経費管理態勢(体制)の強化による効果的な資源配分及び装備品維持、部隊においては整備体制の見直しや各種後方機能の集約及び合理化、防衛関連企業においては補給処整備態勢の見直し、部外力の更なる活用等を考えている。

## (1)後方の最適化のために

#### <整備態勢(体制)の見直し>

F-35 や KC-46A 等の新規装備品の維持の特性を踏まえた最適な後 方態勢を構築することが主眼となる。装備品技術の向上により、油圧、 電機、エンジン特技員を航空機整備に、計器、火器管制を機上電子整 備に特技統合するとともに、「ライン&ドック体制」への移行により 整備の柔軟性及び効率性の向上を図っていく。

## <後方態勢(体制)の最適化>

現在部外力の活用に関して官民の役割分担の見直しについても検討を進めている。部隊における一部のショップ作業を民間企業へ委託するなど、新領域への対応や就労人口の減少等による影響を踏まえ、官民の業務分担の見直しについて検討を深化するとともに、保全などの

装備品等の特性を踏まえ、官保有施設の活用について検討していく。 即ち、民を更に活用しつつ、官民双方のリソースを有効活用した後方 態勢の実現に努めていきたい。

<部外力の活用による最適な後方態勢の確立>

T-4 支援整備、機関砲の整備等の一部部外委託、洗機、計測器検定 業務など、従前から部外業務委託を拡大してきたが、更なる部外委託 拡大に向け検討を推進している。

#### (2) 可動装備品の最大確保のために

<予算(維持経費)管理機能の強化>

予算がこれだけ増えている中で、予算要求→予算執行→分析 / 評価

→改善の PDCA サイクルにより、循環型業務体制による装備品の可動数最大化を図っていく。

<民生先端技術等の活用> 令和5年12月に運用を開始



した空自クラウド上の後方支援サービスに、補給処で積算するための プログラムが入っており、ここに AI 技術が導入されている。後方支 援サービス・データベースから基地消費予測を AI により算出し所要 量算定につなげる等、最新の民生技術の導入を推進している。

#### <包括契約・PBL 契約の推進>

部品在庫の安定確保、リードタイムの短縮による装備品可動数の最大化に資する取り組みとして、包括契約・PBL 契約の推進がある。既に取り組んでいるものとして F110 エンジン維持部品包括契約、F-15機体包括契約、KC-46A 包括補給処整備・技術支援・包括部品支援契約、K/C-130H の PBL 契約などがあり、契約の回数を減らして部品取得までの期間短縮化、また経費の抑制、業務の効率化といった効果も期待できる。併せて企業側の事業の予見可能性も確保でき、ひいては適正な利益の確保や防衛産業からの撤退防止、継続的な協力にもつながるものと考えている。今後更なる包括契約・PBL 契約の拡大・推進を図っていく。

## <FMS 管理機能の強化>

FMS 契約の納期は「見積り」であり、実際には納入遅延が頻発している。こうしたことから昨年4月、空幕装備計画部にFMS管理班を設置し、FMS 事業の執行状況、納入遅延状況を把握し、防衛装備庁と連携して適切な事業管理機能を強化している。主要装備品の導入においては、各プログラムレベルにおける会議体により、省全体として問題の早期解決を促進中である。

## <官民連携の一層の強化>

年2回の官民意見交換会及び分科会、並びに電子メールによる情報共有・意見交換などにより、予算だけでは解決できない課題の解決を図る。例えば、企業にとっての予見可能性を担保、事業の継続性確保と企業撤退の防止、長期的なパートナーシップの確立、より効率的な契約手法の検討等を進め、防衛力の抜本的強化の実現のため、官民連携の強化を推進していきたい。

## (3) 粘り強く戦うために

## <保管に係る抗たん性の確保>

現在、各補給処で担任品目ごとに集中保管している物品を相互に持ち合うことができないか、つまり保管場所の分散(補給処相互補完、部隊補給倉庫の活用等)、加えて民間の物流倉庫等を活用できないかについても検討している。

## <燃料の安定的確保>

現在、燃料元売り業者は各々のタンクから専属契約のタンクローリーで空自基地の燃料タンクに輸送しているが、これを PFI 事業により空自として基地外の燃料タンクを新規建設して空自基地の燃料タン

クまで輸送する事業について検討している。また公道走行可能な空自 燃料給油車の取得など、防衛省独自のサプライチェーン強化について 検討している。

## <機動分散運用を行う体制の構築(整備・補給)>

令和5年度の自衛隊統合演習(05JX)において、空自基地が使用できない事態を想定して戦闘機を民間空港に一時的に退避させ機動分散運用を図ることを目的として民間空港への戦闘機の展開を行った。

現在、機動分散運用については、航空機整備器材、人員活動用物資、被害復旧資材等について計画的に整備している。資材のみならず、より少ない人数で展開対応できるよう、米空軍における MCA(Multi Capable Airman)のように一人が様々な特技をカバーできるよう隊員を育成するなど、後方支援のための要員養成も重要ポイントである。 <輸送力の強化(自隊)>

輸送機等の可動率向上による航空輸送力の強化、大型車両の取得やコンテナ規格の統一等による輸送力の増強・効率化、統幕事業で立ち上げている輸送機のPFI活用検討、輸送用無人機といった先端技術の活用について調査研究を実施している。輸送業務の効率化に加えて、こうした機動分散運用等に資する輸送能力の向上を推進している。

#### <輸送力の強化(自隊輸送・民間力以外)>

欧州では、欧州移動調整センター(MCCE: Movement Coordination Center Europe)という枠組みが運用されており30か国の航空・海上・陸上輸送及び空中給油のアセットの相互利用調整を行う枠組みがある。また、昨年2024年9月にQUAD首脳会談において、多国間輸送調整枠組み構築に関する共同声明の中で、「インド太平洋ロジスティクスネットワーク(IPLN: Indo-Pacific Logistics Network)」の設置が提示された。これはACSAの枠組みを活用して輸送力の相互補完を行うものであり、現在関係国と調整を行っている。これらの他、日米の空軍種間における輸送力相互補完(Airlift Sharing)について5空軍から提案されており、議論を進めている。

#### <遠隔地整備支援態勢の構築>

整備基盤がない国内外飛行場、機動展開先、離島やへき地のレーダーサイトなどの遠隔地の現場と母基地・補給処等を会社と連携してリモートで繋ぐなど、制限された地域への遠隔地からの整備支援施策においては、平時のみならず有事でも民間力の活用を期待できると考えている。

#### (4) 防衛生産技術基盤強化のために

#### <防衛生産基盤強化法に係る各種取り組み>

防衛生産基盤強化法は、戦略三文書における「防衛生産基盤は、いわば防衛力そのもの」を受けて令和5年10月1日に施行された。従来、防衛省・自衛隊と防衛産業の関係は、個別の契約でのみ繋がっていたが、本法律は、防衛産業としての位置づけを明確にして、国が主体的にサプライチェーン調査、基盤強化の推進、装備移転円滑化措置、資金の貸し付け、製造施設等の国による保有、整備品等契約の秘密保全など、各種取り組みを積極的に協力・推進するものである。空幕装備計画部としても防衛装備庁と連携しつつ積極的に協力し推進していきたい。

また、平成26年に策定された「防衛生産・技術基盤戦略」が今般の防衛生産基盤強化法を受けて、新たに「装備品等の開発及び生産のための基盤の強化に関する基本的な方針」に置き換わっている。これには特定分野での国産の追求、同盟国との相互補完、政策的手段としての装備移転の重要性等、防衛技術基盤強化の基本的考え方が記述されている。今後は令和7年度中を目途に、「防衛産業戦略(仮称)」を新たに策定する動きがある。経産省や防衛装備庁との連携は、非常に密になっていると感じている。

< DICAS: 防衛産業協力、取得、維持整備定期協議>

2024年4月の日米首脳会談において、日米防衛産業が連携する優先分野を特定し、共同開発、共同生産及び共同維持整備を推進すべく、新たに DICAS (Defense Industrial Cooperation, Acquisition and Sustainment) という枠組みを設置することで合意し、既に3回のDICAS 及び複数回のワーキング・グループ(ミサイル共同生産、航空機維持整備など)が行われている。2024年7月の日米2+2において、AMRAAMやPAC-3の共同生産の機会を追求することで合意されている。航空機整備については先ずパイロット・ケースを特定し議論を進めることとなっている。今後も日米2+2の合意などに基づいて日米の防衛産業協力は更に深化していくものと考えている。

米国の後方戦略を俯瞰しておきたい。まず NDIS(National Defense Industrial Strategy、国家防衛産業戦略)は、今後3~5年にわたる防衛産業基盤強化のための指針として米国防省が2024年1月に初めて策定した戦略文書であり、取り組むべき重点領域の一つとして、強靭性のあるサプライチェーンが列挙され、同盟国・同志国全体で複数の生産ラインを積極的に整備・維持することが不可欠と記されている。

次に RSF(Regional Sustainment Framework、地域維持整備枠組み)は NDIS に基づくグローバル・パートナーシップの活用に重点を置いた米軍の枠組みであり、より前線に近い場所での共同維持整備システムについて記述されている。

GENUS(Global Enterprise Network for Universal Sustainment)はRSFを踏まえた米空軍の戦略であり、RSF同様の考え方が記載されている。昨年 GENUS 関連で米空軍要員が来訪したが、インド太平洋地域における米空軍の維持整備拠点が限られていることに危機感を持っており、この地域での拠点を拡大したいとの強い意向があると感じた。

整理すると、日米間の DICAS は米国の NDIS、RSF、そして RSF の流れの中における 2 国間の枠組みということになる。

#### 5 おわりに

本日の説明の多くは、防衛目標を達成するための3つのアプローチ、特に我が国自身の防衛態勢の強化に焦点を置いたものであるが、他方、米軍等のグローバルなサプライチェーンの維持整備基盤の確保に向けた動きがあるように、空自の後方基盤強化についても同盟国及び同志

国との連携の強化が不可欠であると考えている。後方分野における相 互運用性、相互運用能力の更なる向上を視野に入れ、より重層的な他 国との連携が重要であると考えている。本日紹介した諸施策を推進し て空自後方が一丸となって目標達成に邁進してまいりたい。

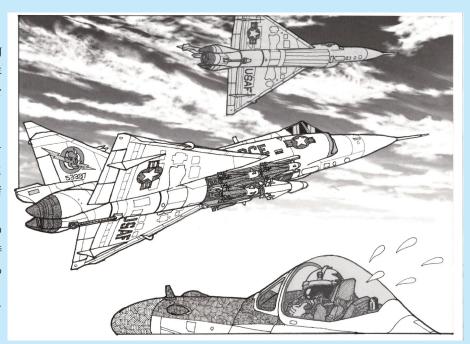
#### 【質疑応答】

- Q1: 民間能力を有事においても活用するために、現在防衛省や国 は如何なる調整を行っているのか。
- A1: 政策的な内容ついては回答を持ち合わせていないが、人事施 策としては、可能性として退職自衛官が予備自衛官として民間 企業に入り、有事においてもそれぞれの能力を発揮してもらえ るのではないかという議論が行われている。
- Q2: 予算は増えているものの、宇宙・サイバー、ドローン等の対処すべき領域も増え、新たな装備品も導入している局面において、防衛生産・技術基盤の強化は難しいのではないか。
- A2: まずは正面と後方の予算のバランスを確保すること、また新たな装備品の取得については、努めて構成品のライセンス国産や国内修理基盤を少しずつ拡大し、そのための予算を確保していきたいと考えている。
- Q3: FMS の納入遅延問題の原因はほぼ米側にあると思うが、説明された管理機能の強化による日本側の改善策で解決なのか。
- A3: FMS については幾度も国会でも指摘されているが、2016 年 に SCCM(Security Cooperation Consultative Meeting、安全保 障協力協議会合)というハイレベルの枠組みができ、手続の促 進や納入遅延防止の議論がなされている。昨年 4 月に新たに装 備計画部に設置した FMS 管理班による FMS 調達管理機能の強 化により、空自のニーズを防衛装備庁に伝え、各レベルでの連携強化を図っていく所存である。
- Q4: 人手不足の現状等、不透明な将来にどう対応していくのか。
- A4: 民間も米軍も、人手不足はこれから直面していく問題である。 後方全般のブレーク・スルーとなり得るものとしては、先端技 術をいかに活用していくかがポイントだと思っている。

## ※富岡 OB コメント

『F-102A デルタダガーは、F-104J の取得が決まっていた昭和 34 年の暮れから、F-86F 及び F-86D をサポートする目的で、三沢、横田、板付に配備されました。

高高度での特性及び推力に優れており、当時のF-86Dパイロットには、F-102A導入を期待していた者も少なくはなかったと聞きました。結局、昭和34年~昭和40年間の助っ人となったのですが、撤収時には、配備されていた75機まとめて97億円と格安で売却するという提案もあったようです。国としては断ったようですが・・・・』



作:富岡 OB

# 令和6年度日米優秀隊員表彰

Commendation for Koku-Jieitai & USAF Brilliant Soldier in FY 2024

令和7年2月下旬~3月中旬にかけて、令和6年度 JAAGA 日米隊員表彰式が、三沢、横田及び那覇の各基地において行われた。本表彰行事は、空自と米空軍の友好親善と相互理解に貢献した隊員を表彰することを目的として平成10年度から行われているものであり、今回が27回目となる。これまでの被表彰者数は総計197名(空自117名、米空軍80名)を数えた。今年度は、4基地すべてで祝賀会食を含む全行程の行事を執り行うことができた。表彰式においては、丸茂会長(沖縄地区は西谷会長代行)の挨拶に続いて日米の被表彰者それぞれに表彰状と記念楯が授与され、その功績が称えられた。各地区における表彰行事の概要については、以下のとおり。

# 三沢地区表彰式 Misawa area (Misawa AB)

令和7年2月20日(木)、令和6年度三沢地区 JAAGA 表彰 行事が三沢基地米空軍ミサワクラブ(旧NCO クラブ)におい て実施された。

三沢における表彰行事は、主催者となる丸茂会長、池添三沢支部長、山本三沢支部事務局長をはじめ JAAGA メンバー5名のほか、航空自衛隊から北部航空方面隊副司令官石引大吾空将補、第3航空団司令兼三沢基地司令藤田輝章空将補、米空軍から第35戦闘航空団司令官マシュー・ケンケル大佐(Col Matthew Kenkel)、35航空団先任下士官トロイ・ガント最上級曹長(CMSgt Troy Gant)をはじめ日米双方約50名が出席された。また、三沢市防衛協会会長相場博氏はじめ三沢基地周辺協力団体の皆様のご臨席を賜り、総勢約60名が参加する盛大な式典となった。

今年度の米空軍側被表彰者は、35 航空団第35 任務支援群第第35 憲兵隊タイリース・ビーソン3等軍曹(SSgt Tyrese T. Beeson)であり、グアムのアンダーセン基地で実施された多国間の上級戦闘技能評価競技会に航空自衛隊が初めて参加するに当たってその指導に尽力し所望の成果を収めたことに貢献する等の功績が高く評価されての受賞となった。

また、航空自衛隊側被表彰者は、3空団基地業務群射場勤務 隊丸橋仁1等空曹であり、三沢対地射爆撃場の射場勤務に係る 米空軍との調整を密にして日米の円滑な飛行訓練に貢献したほ か、管理隊勤務時、米側と連携し円滑な入門業務に尽力し第35 憲兵隊司令から感謝状を授与される等の功績が高く評価されて の受賞となった。

表彰式は、北部航空音楽隊による日米両国歌の演奏から始ま

り、冒頭の丸茂会長の挨拶では、国際環境が急激に厳しさを増 し日米同盟の重要性益々重要になる中で、黙々と任務を果たし ている日米両部隊への敬意と感謝、本表彰事業の意義、被表彰 者への祝意と感謝、そして本表彰行事に係る多くの関係者、特 に三沢基地の積極的なご協力、ご支援に対するお礼が述べられ た。挨拶に続いて丸茂会長から日米の被表彰者それぞれに表彰 状と記念楯が授与され、その功績が称えられた。

来賓祝辞においては、藤田基地司令から、被表彰者に対するお祝いと感謝の言葉とともに、「三沢基地は日米の部隊が一緒に所在する得難い環境にある。今回表彰されたお二人を模範とし、今後もより一層強固な友情を築いて参りたい」旨の決意が述べられた。また、ケンケル司令官からは、被表彰者の活躍を讃え今後とも日米友好に尽力されることを期待する旨の発言があり、JAAGAが本表彰行事の他、スペシャルオリンピックをはじめ日米の様々な活動を支援していることに対し感謝の意を述べられた。

表彰式後の祝賀会食においては、三沢つばさ会会長山本方之 氏の開会のご発声で和やかな食事会が始まり、三沢基地におけ る活発な日米交流行事の話題などで会話が盛り上がった。会食 の終盤には日米の被表彰者から挨拶があり、緊張した面持ちで、 今回の受賞を光栄に思うこと、また、支えてくれた上司、同僚、 家族への謝意、そして今後も日米の友好関係強化につながる活 動を続けていきたいとの抱負が述べられた。

会食の最後は、池添三沢支部長による英語のスピーチで締め くくられ、すべての行事が盛会のうちに終了した。

本行事の開催にあたって多大なるご尽力をいただいた日米三 沢基地の関係各位に対して心から感謝申し上げます。

(島津理事記)





→ SSgt Tyrese T. Beeson,35th FW

 $\rightarrow$  MSgt MARUHASHI Jin,3rd FW



# 関東地区表彰式 Kanto area (Yokota AB)

令和7年3月14日(金)、令和6年度関東地区 JAAGA 表彰行事が横田基地において執り行われた。JAAGA からは丸茂会長をはじめとする理事3名、空自からは航空総隊司令官谷嶋正仁空将、作戦運用隊司令兼横田基地司令細川裕一1佐、第2輸送航空隊副司令木下遼一1佐、宇宙作戦群第1宇宙作戦隊長吉原将和2佐など約30名、米軍からは第374空輸航空団司令官リチャード・マックエルハニー大佐(Col Richard F. McElhaney, Commander of Yokota A.B.)を含む約10名が参加した。

今年度の米空軍側被表彰者は374 航空団従軍牧師 デュリューヴ・シン3等軍曹(SSgt Dhruv Singh)であり、日本の非営利団体と協力してフードドライブ、地域の清掃活動、児童養護施設でのイベントを通じて地域社会に貢献した。また、料理教室やレクリエーション活動、感謝祭のイベントを通じて航空自衛隊との文化交流を促進し、自衛隊と米軍の関係強化に大きく貢献したと評価されての受賞となった。

空自横田基地からの受賞者は、総隊司令部訓練課の片野友生 准尉であり、2023年度の横田基地准曹会会長として、6月に は米空軍部隊と連携した基地のフェンスライン清掃活動を実施 し、同年11月には障害を有する選手が参加する米軍主催のス ペシャル・オリンピックスに対し支援ボランティアを組織して 競技会の運営に大きく貢献するなど、強いリーダーシップを発 揮して各種イベントを成功に導いたことが高く評価されての受 賞となった。

空自入間基地からは、2輪空隊第402飛行隊の新村文隆2等空曹が選出され、コープノース24に本部班要員として参加してアンダーセン基地司令及びContingency Response Groupの双方から日米の隊員の上位10パーセント以内に授与されるトップパーフォーマー表彰を受賞したことや、空自402飛行隊と第36航空団をはじめとする米空軍部隊との懇親会等を企画するなど、部隊レベル及び個人レベルでの信頼関係構築に大きく貢献したことが高く評価された。

空自府中基地からは、宇宙作戦群の玉井千裕3等空曹が選出され、特に第1宇宙作戦隊の多国間連携担当者として米宇宙軍との緊密な連携を通じ、部隊の早期運用開始のための能力構築

に寄与した功績や、米宇宙軍による第1宇宙作戦隊の研修時に は受け入れ準備とブリーフィングを行うなど相互理解の促進に 貢献したことが高く評価されての受賞となった。

表彰式は、冒頭の丸茂会長の挨拶で始まり、日米同盟の重要性、 運用の最前線で日夜任務を遂行している日米両部隊への敬意と 感謝、被表彰者への祝意と感謝、そして本表彰行事に係る多く の関係者、特に横田基地の積極的な協力と支援に対する謝意を 述べた。挨拶に続いて、丸茂会長から日米の被表彰者それぞれ に表彰状と記念楯が授与され、その功績が称えられた。なお米 側被表彰者シン3等軍曹は任務のため不参加であったため、上 司であるマーク・ユクター中佐が代理で受賞した。

来賓祝辞では、細川横田基地司令から被表彰者に対するお祝いと感謝の言葉とともに、日米が「阿吽の呼吸」で理解しあえるレベルまで相互理解を深めたいとの希望が述べられた。また、マックエルハニー司令官からは、被表彰者の活躍を讃えつつ、今後とも日米友好に尽力されることを期待する旨述べるとともに、JAAGAの活動に対する感謝の意が表された。

表彰式後の祝賀会食では、総隊司令官の挨拶と乾杯の発声で 和やかな食事会が始まり、横田基地における活発な日米交流行 事の話題などで会話が盛り上がった。会食の終盤には日米の被 表彰者から挨拶が行われ、特に空自の被表彰者3名は全員が英 語で見事な挨拶を行い、参加者からの賞賛の拍手を浴びた。

会食の最後には、丸茂会長が参加者全員に対して感謝を述べるとともに、5月開催予定のJAAGA総会に日米の被表彰者を招待することを伝えた。本行事の開催にあたり、多大なるご尽力をいただいた関係者の皆様全員に感謝申し上げます。

(高橋理事記)

WO KATANO Tomoo, Headquarters, Air Defense Command





TSgt SHINMURA Fumitaka,2nd TAG

SSgt TAMAI Chihiro, Space Operations Group



Commemorative photo with the award winners at Yokota AB

# 沖縄地区表彰式 Okinawa area (Naha AB)

令和7年2月26日(水)、令和6年度沖縄地区 JAAGA 表彰 行事が航空自衛隊那覇基地で実施された。

那覇基地における表彰行事は、主催者たる丸茂会長が急な所用により参加できなくなったため、急遽、西谷理事を派遣し、代行者として式を執行、JAAGA沖縄支部からは丸野支部長をはじめとする賛助会員等4名のほか、空自から南西航空方面隊司令官寺崎隆行空将、第9航空団司令兼那覇基地司令鈴木繁直空将補、嘉手納基地からは、第18航空団運用群司令官デイビッド・A・デプチューラ空軍大佐(Col David A. Deptula)をはじめ日米双方約40名にご臨席いただいた。

今年度の航空自衛隊側被表彰者は、第9航空団整備補給群装備隊奥苑慎二1等空曹であり、米空軍第18爆発物処理小隊との調整や装備品研修等あらゆる機会を通じ交流を深化させるとともに、日米共同施設部隊訓練においては米軍とともに不発弾処理訓練を立案、滑走路被害復旧に必要な能力の向上を図り、また米軍担当者と考案した評価要領により不発弾処理補助者の円滑な養成に尽力する等の功績が高く評価されての受賞となった。

また米空軍側被表彰者は、第18 航空団第18 運用支援中隊エレン・M・ハーマン少佐(Major Ellen M. Herrmann, 18th Operations Support SQ, 18th Wing, Kadena AB)であり、指揮統制の専門家として、定期的なミッションや部隊間イベントへの参加を通じ、部隊間の仲間意識の醸成に尽力されるとともに、ヴァリアント・シールド演習では指揮統制器材の説明や当該器材研修の主導、またサザンビーチ演習では指揮統制作戦の教育及び実践により統合戦闘能力を大幅に強化する等の功績が高く評価されての受賞となった。

表彰式は現在の南西方面の情勢に鑑み、参加者の拘束時間を 局限するため、昨年同様、合同庁舎3階エントランス・ホール において実施した。

なお、18 航空団司令官エヴァンス准将も所用により出席がかなわなかったが、デプチューラ運用群司令官が参加されるとともに、奥苑1 曹は奥様を伴われ、ハーマン少佐は職場の同僚とともに表彰式に参加された。

表彰式は、南西航空音楽隊の森田早貴3等空曹による日米国 歌独唱から始まり、冒頭の挨拶において、西谷会長代行から、 昨今の厳しい国際環境、日米同盟の重要性の高まりに言及、その中で黙々と任務を果たしている日米両部隊への敬意と感謝を伝えられ、優れた働きをする隊員は日米両国の宝と述べられるとともに、本表彰行事に係る多くの関係者、特に那覇基地の積極的なご協力、ご支援に対するお礼が述べられた。挨拶に続き、西谷会長代行から日米の被表彰者に表彰状と記念楯が授与され、被表彰者の功績が讃えられた。

来賓祝辞において、鈴木基地司令及び米空軍を代表してデプチューラ運用群司令官からご祝辞をいただいた。お二方からは、日米両国の協調が日本、引いてはインド太平洋地域の安定と繁栄に大きく寄与し、礎となっていること、昨今では、その協調が部隊レベルまで浸透して、大切な絆となっており、今回の受賞者の活動は正にそれを具現化したものであって、今後もこの良好な環境を継続するために尽力すると強調され、受賞者に賛辞と敬意のお言葉を述べられた。

表彰式後の祝賀会は、丸野支部長のご挨拶から始まり、出席者は那覇基地給養班により丹精込めて調理された「タコライス」に舌鼓を打ちつつ、終始和気あいあいと受賞者を称える温かな雰囲気に包まれた会となった。最後に、9空団整備補給群司令岩切1佐から締めのお言葉をいただき、すべての行事が盛会のうちに終了した。

最後に、本行事にあたり、ご尽力いただいた那覇基地及び嘉 手納基地の関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

(荒木(哲)理事記)



Maj Ellen A. Hermann,18th Operation Group, 18th Wing



MSgt OKUZONO Shinji,9th FW



作:宇山OB



Commemorative photo with the award winners at Kadena AB

## 受賞者及び功績の概要

## JAAGA AWARD 2024 Recipients and their Achievements

	部隊	受賞者	功績の概要
航空点	第 3 航空団 (三沢) Misawa 第 9 航空団 (那覇)	MSgt MARUHASHI Jin 1等空曹 丸橋 仁	三沢対地射爆撃場勤務に係る米空軍との調整を密にし、日米の円滑な飛行訓練に貢献したほか管理隊勤務時、米側との連携に努め第 35 憲兵隊司令から感謝状を授与される等航空自衛隊と米空軍との相互理解の増進及び相互運用能力の向上に献身的に尽力 He contributed to the smooth operation of the bilateral air-to-ground training by closely coordinating withe U.S. Air Force stationed at Draughon Range and in his role as a former member of the Security Guarand Transportation Squadron, he is awarded by the Commander of the 35th Security Forces Squadron for his great efforts in closely cooperating with the U.S. Air Force.  米空軍第 1 8 爆発物処理小隊との調整や装備品研修等あらゆる機会を通じ交流を深化させるとともに、日米共同施設部隊訓練においては米軍とともに不発弾処理訓練を立案、滑走路被害後旧に必要な能力の向上を図り、また米軍担当者と考案した評価要領により不発弾処理補助者の円滑な養成に尽力 He has deepened bilateral engagement through varied scenes such as cooperation with 18th Explosives
自衛隊	Naha	MSgt OKUZONO Shinji 1 等空曹 奥苑 慎二	Ordnance Disposal Flight and unit immersion for equipment. Additionally, he has collaborated on planning of bilateral explosive ordnance management training, the improvement of rapid airfield damage repair capability during Japan-U.S. Civil Engineering Units Exercise and coordination with U.S. personn on efficient education for assistants of explosive ordnance disposal with evaluation criteria systematized bilaterally.
K	航空総隊 司令部 (横田) Yokota	WO KATANO Tomoo 准空尉 片野友生	2023 年の横田基地准曹会会長として、米空軍と協力して横田基地周辺の清掃活動を組織・実施するなど、強力なリーダーシップを発揮した。また、米軍主催の障害を持つアスリートのためのスペシャルオリンピックスの支援ボランティアを組織し、イベントの成功に貢献 WO Katano demonstrated strong leadership by organizing and conducting cleaning activities at Yokota Air Base in collaboration with U.S. Air Force members, as the president of the Yokota Air Base Non-Commissioned Officers' Association in 2023. Additionally, he organized support volunteers for the Special Olympics for handicapped athletes, contributing to the success of the event.
o k u   J i e i t a i i	第2輸送 航空隊 (入間) Iruma	TSgt SHINMURA Fumitaka 2 等空曹 新村文隆	コープノース 2 4 に本部班要員として参加し、アンダーセン基地司令及び Contingency Response Group の双方からから日米の隊員の上位 10 % 以内に授与されるトップパーフォーラ表彰を受賞した。また航空自衛 4 0 2 飛行隊と第 3 6 航空団をはじめとする米空軍部隊との懇親会等を企画するなど部隊レベル及び個人レベルでの信頼関係構築に大きく貢献 TSgt Shinmura participated in Cope North 24 and was recognized as a Top Performer, an honor given to the top 10 percent of participants from both the U.S. and Japan, by the Commander of Andersen Air Fore Base and the Contingency Response Group . He helped build U.SJapan mutual trust at both the unit an individual levels by organizing gatherings between the 402nd Squadron of the Koku-Jieitai and the 36th Wing of the U.S. Air Force.
	宇宙作戦群 (府中) Fchu	SSgt TAMAI Chihiro 3 等空曹 玉井千裕	第 1 宇宙作戦隊担当者として米宇宙軍との緊密な連携を通じ部隊の早期運用開始のための能力構築に寄与。またGS24参加時は連絡要員として活躍し参加国間の円滑な連携に貢献 SSgnt Tamai is in charge of multilateral coordination for the 1st Space Operations Squadron and has contributed to building close cooperation with the U.S. Space Command. During her participation in GS24, she enhanced mutual understanding by giving briefings and played an active role as a liaison, ensuring smooth coordination among participating countries.

N/A	35th Fighter Wing (三沢) Misawa	SSgt Tyrese T. Beeson 3 等軍曹 タイリースTピーソン	グアムのアンダーセン基地で実施された多国間の上級戦闘技能評価競技会に航空自衛隊が初めて参加するに当たってその指導に尽力し航空自衛隊隊員が所望の成果を収めたことに貢献  He made significant efforts in instructing the members of Koku-Jieitai, and contributed to the successful outcome during their first-ever participation in the multinational Advanced Combat Skills Assessment Competition held at Anderson Air Base, Guam.
米空軍 USAF	374th Airlift Wing (横田) Yokota	SSgt Dhruv Singh 3 等軍曹デュリューヴ・シン	市民への食料品の配布の調整、市内の清掃活動の指導、航空自衛隊の隊員との文化交流(感謝祭のポットラックを含む)を通じて、日米の友好関係の強化に貢献した。彼の努力により、多くの米空軍軍人が日本の地域社会や航空自衛隊との関係を深めた。 SSgt Dhruv Singh contributed to enhancing the Japan-US friendship through coordinating food drives, leading street clean-up activity, holding cultural exchanges with Koku-Jieitai personnel including thanksgiving potluck. His efforts integrated many U.S. members into Japanese comm and Koku-Jieitai.
	18th Operations Group, 18th Wing (嘉手納) Kadena	Mai Fllen A Hermann	指揮統制の専門家として、定期的なミッションや部隊間イベントへの参加を通じ、部隊間の仲間意識の 醸成に尽力されるとともに、ヴァリアント・シールド演習では指揮統制器材の説明や当該器材研修の主導、 またサザンビーチ演習では指揮統制作戦の教育及び実践により統合戦闘能力を大幅に強化 As a C2 expert, She has maintained a spirit of camaraderie through regular mission execution with Koku- Jieiai and led the first Koku-Jieitai tour of the equipment during Exercise Valiant Shield. Furthermore, she has drastically strengthened joint combat capabilities through C2 operations training

# 米空軍将校 航空自衛隊勤務だより

during the Southern Beach exercise.

Letter from USAF Officer Working in Koku-Jieitai

## 航空自衛隊幹部学校 アラナ・R・キース中佐

少佐 エレン A. ハーマン

こんにちは皆様!私は米空軍のアラナ・キース中佐です。 今は目黒基地の航空自衛隊幹部学校で交換幹部として、米 空軍のドクトリンと作戦について、航空自衛隊の幹部に教えて います。幹部学校の教官室に配属されていて、一日中空自の 同僚と一緒に勤務しています。

この仕事は、間違いなく私にとって一番有意義で好きな経験です。

最初から、私の同僚は、皆、経験が豊富なだけではなく、 愛想がよく、私は仲間に入れたと感じました。それは、アメリカ空軍基地での歓迎と同等かそれ以上でした。

この仕事は、私にとってはじめての教官の経験です。海外地域担当士官として、同盟国またはパートナーと一緒に、共同活動を計画して、実行して、私たちの母国の目的を追求します。私は今までに、INDOPACOM(インド太平洋軍)の司令部で、ASEAN(東南アジア諸国連合)とインドネシアのデスクオフィサー(担当者)として勤務しました。そこで、パートナー国と、二国間と多国間の会議、訓練や演習等を計画してきました。中でもインドネシアの大規模演習の一つである GARUDA SHIELDを、二国間で一つの軍種のみで行っていた演習を、20か国以上の多国間・全軍種の演習にしたのは私の最大の功績の一つです。ただし、私だけの功績ではない。それは多国間・全軍種のチームの努力でした。現在も、その演習の展

開が続いています。

それでも、海外地域担当士官として、仕事は大きいチーム と大きい目的を追求するだけじゃなくて、時々、自分一人で、 任務を遂行する必要もあります。それが交換幹部。

ある人にとって、一人で外国に住んで仕事をすることは大変です。違う言語と違う文化は時々怖い。(コロナ注射が必要とか、長い旅行をしたい、郵便はどうやって?)でも、教官グループは、皆が日本に住んでいて仕事をしている。私の暮らしを快適にして、必要な手伝いを提供しくれました。先生になるのもはじめてですけど、「安心して」というメッセージをたくさん受け取りました。

それで、先生になりました。私は外国人ですが日本語で教えます。時々間違うけど、自衛隊の学生たちから面白い質問や「高論卓説」をもらって、それは学生が学んでいる証拠だと思い、本当にやりがいを感じています。



We celebrated each other's birthdays at the top of Mount Fuji!!

日本での暮らしはアメリカとは全然違います。日本では、私 たちは歩くことが多いです。歩いて、私はもっと気づいて、もっ と経験して、その日その日で世界が変わるのを見ます。アメリ カでは車で移動することが多く車窓から見える風景はあっとい う間に流れて消えます。昨秋、目黒基地に歩いて入ったとき、 歩道の隣に咲いていた彼岸花に気づきました。「あ-!この 季節」と「あ-!その場所」と思い出しました。その二日後、 週末に直ちに「魔法的赤い野原」を見るために電車で埼玉県 の巾着田にすっ飛んで行きました。車で仕事へ行っていたら、 その花を見逃していたでしょう。

私にとって、日本は素敵な国で、「古い」と「新しい」、「レト

ロ」と「シック」、「自然」と「技術化」 という調和的なブレンドを持ってい ます。スペースは限定されている から、町の広さ平方メートルごとに 細部が詰まっていて、限りなく面白 いです。趣味でアーティストとライ ターとして、景色の雰囲気を写すた めに、その景色に見入って、全部 覚える欲求を抑えられません。



日本文化が好きな人として、やっぱりアニメも好きで、それ でコスプレも好きです。一番大好きな趣味である旅行の時、 日本でも海外でも、旅行場所に似合う独自のコスプレをデザイ ンします。

ある旅行で山口県に行きました。私の好きなアニメのキャラ クターのモデルにもなっている「中原中也の会」が開催した講 演を見に行きました。少ない外国人の参加者として、その会 のメンバー達は、私が遠い東京から山口で開催する講義のた めに旅行してきたことにびっくりしてくれたことが、嬉しい。そ れで、私は誠実に他国の文化について学んでみて味わうこと に価値があることに気づきました。そしてその時、「中原中也 の会」のメンバーとなりました。

私は日本に住んでいる外国人として、日本人に私のそういう ところを認識してもらいたい希望があります。

外国人と日本人の間の関係は、かなり難しいです。日本人 にとって、日本は普通です。外国人には、日本は素敵な国。 その上、日本人は外国人のことについてあまり知りません。さ らに、外国人は日本人の実体についても何も知りません。お 互いが、友達になるのは大変です。でも、中核は、大体同じ だと思います。

日本に来て一年後に、やっと、日本人の友達ができました。 友達は自衛隊の英語クラブで会って、ハイキングに同じく興味 があると知りました。即座に、私たちは富士山を登る予定を立 てました。

私たちは通訳者になりたいのです。それで、時々、お互い にインスパイアし合っています。そしてその上、一番大切な事 はお互いの文化と言語について学びあいたい感じが共通して います。

同じ言語をシェアしないと、友達を作るのは大体無理です。 そのうえ、他の人の文化について何も学ばないと、友達にな

るのは絶対無理です。それで、一 番良い友達を作る方法は、言語の レベルがどうであっても、相手の 文化に誠実に興味を持つことです。 国の間でも、そのような誠実な 興味が必要です。日本の人々が、

アメリカで起こっている出来事に注 意を払ってくれることを願っていま す。この次の四年、アメリカはい い友達が必要です。

これらは、交換幹部として、私

Made by Alanna

の日本の暮らしについての一般的な考えです。これからも、 日本にズーッと住んでいきたいです。これからも、よろしくお願 いいたします。

# Alanna!!



Coolii

# 令和6年度JAAGA三沢基地等研修

JAAGA members' Visit to Misawa AB on Feb 4 and 5 `25

JAAGA 会員による三沢基地研修が、2月4日(火)、5 日(水)の日程で実施された。研修団は、団長に正会員の 小川剛義氏を、副団長に個人賛助会員の奥岡久幸氏と法人 賛助会員の倉持愛美氏を迎え、正会員2名及び賛助会員 23 名(法人8名、個人15名)の総勢28名が参加した。 また、JAAGA 理事 4 名(引田、岩崎、今瀬及び浅井)、三 沢支部池添支部長及び山本事務局長が研修を支援した。

## 【研修初日】

## 《結団式》

今シーズン一番の冷え 込みとの予報であった が、真冬の空気にさら されるも、穏やかな陽光 の中参加者が続々と、白 い息を吐きつつ、入間基 地稲荷山門に集結してき た。中部航空警戒管制 団から車両輸送支援を受 け、入間基地空輸ターミ ナルに到着すると、ター ミナル前には中部航空 方面隊司令官門間政仁空 将と中警団司令兼基地司 令杉山公俊空将補にサプ ライズのお出迎えを頂い た。団長及び副団長は、







ターミナル1階特別室において中空司令官及び中警団司令 との懇談後、ターミナル2階において結団式を行い研修開 始となった。搭乗手続き実施後、C-130 輸送機に搭乗、予 定通り入間基地を離陸し、一路三沢基地に向かった。

## 《北空司令官講話》

ほぼ予定通りの時刻に三沢基地に着陸した C-130 輸送機

から降機した研修団員か らは「やはり寒い」など の言葉が聞かれる中、ち らほら雪の残るランプ地 区で池添三沢支部長の出 迎えを受け、3空団の輪



送支援バスに乗り込んだ。北空司令部庁舎到着後、団長及 び副団長は、応接室において北空司令官亀岡弘空将及び副 司令官石引大吾空将補との懇談に臨んだ。その後、会議室 に場を移し、司令官から講話を頂くことができた。北空の

概要から始まり、我が国を取り巻く安全保障環境、我が国 周辺の情勢の説明の後、防衛省・自衛隊の取り組みとして、 統合司令部、宇宙・電磁波領域、スタンドオフ防衛能力及 び次期戦闘機等幅広い項目を非常にわかりやすく説明いた だいた。そして最後に今後の主要な課題として、人的基盤 の強化が強調され、その取り組みを詳しく説明していただ けた。講話後の研修団員からの活発な質問にも丁寧に対応 していただいたことも強く印象に残るものであった。

研修団は再びバスに乗車後、三沢基地幹部食堂に移動し、 体験喫食に臨んだ。早朝からの移動、司令官講話など、緊

張から解放されたひと時を 共有することができた。

## 《基地司令講話》

午後の研修は、3空団司 令兼三沢基地司令藤田輝章 空将補の講話からスタート した。航空自衛隊三沢基地 の概要と題された講和で は、基地の沿革から始まり、 所在部隊・装備品、基地の 特徴として米軍との共同使 用の状況や地域との関わり



にも触れた後、三沢小話として三沢のレストラン事情等に ついてユーモアを交えて披露された。最後に F-35 へのか かわりの説明をもって講話の終了となった。講話後の質問 では、F-35の整備や騒音など、非常に答えにくいであろう 質問にも時にユーモアを交えながら対応していただけた。

## 《航空機研修》

研修団は、格納庫に移動し、F-35A、E-2D、RQ-4Bの見 学を行った。研修員は3つのグループに分かれて、それぞ

れ 20 分ずつ計 1 時間にわ 身近に各機体を見ることが でき、大いに満足したよう であった。RO-4Bでは、キー ホルダー等の記念品が用意 されており希望者はどれに するか迷いながらも、希望 のものを手に入れ満足そう であった。その後、各機体 の前で記念撮影をし、格納 庫を後にした。





宿舎である三沢インに宿泊できることを楽しみにしている 研修団員も多いなか、待望のチェックインに向かった。ロ ビーにて異国情緒に触れた後、各自の部屋へと移動、米軍 クラブでの夕食懇親会に向けてしばしの休息をとった。

## 《夕食懇親会》

18 時から開始された米軍オフィサーズ・クラブにお ける JAAGA 主催懇親夕食会には、空自からは亀岡北空 司令官、同副司令官石引空将補、藤田基地司令、北警団 司令定免克己空将補等の基地主要幹部及び北空准曹士先

任谷出義明准空尉、-方、米空軍からは第35 戦闘航空団司令官ポー ル・デイビッドソン大 佐 (Col Paul T. Davidson, Commander, 35th Fighter Wing)、第35作戦群司 令グレゴリー・ケラー 大 佐 (Col Gregory G. Keller, Commander, 35th



Operations Group)、第35整備群司令ブライアン・ウォン 大佐 (Col Bryan K. Wong, Commander, 35th Maintenance Group) 等戦闘航空団主要幹部及び 35 航空団最先任上級 曹長デイビッド・ネヘラ上級曹長(CMSgt David J.Najera, Command Chief 35th FW) 計 18 名がゲストとして参加い ただいた。また、三沢支部山本事務局長も加わり、まずは ソーシャル・タイムでアルコールの力を借りつつ、参加者 の懇親が深まった後、夕食会の開始となった。冒頭、岩崎 理事から JAAGA の活動等についての紹介の後、ゲスト参 加者が米空軍、空自の順に紹介された。続いて小川団長か



ら挨拶があり、自身の現役 時代の経験を踏まえて、空 自と米空軍の連携の重要性 等について強調される等英 語でのスマートなメッセー ジとなった。亀岡北空司令 官、デイビッドソン司令官 からも夕食会への招待と日 頃の JAAGA の活動への謝 意をいただき、ディナーが スタートした。各テーブル では豪華でアメリカンな料 理に舌鼓を打ちつつ、研修 団員同士、研修団員とゲス トの様々な話題で会話が盛 り上がった。

航空自衛官や米軍人と直

接話ができる機会はあまりないので、貴重な機会となった ようである。最後にいかにもアメリカらしい甘いデザート を堪能したところで、夕食会はお開きとなった。夕食会終 了後、研修団員のうち希望者はクラブ内のバーに移動し、 さらに懇親を深めつつ、三沢の夜は更けていった。

## 【研修2日目】

## 《朝食》

朝7時過ぎ、ロビーに集合した研修団員は、マイナス2 度ではあるが青空の下、朝食会場のレストランに向かった。 昨夜懇親を深めた研修2日目の団員は、ところどころ雪の 残る道路を談笑しながらの移動後、レストランでは事前に 選んだメニューを各人楽しんでいたが、あまりのボリュー ムに辟易する者もちらほらみられた。

## 《第35 戦闘航空団司令官講話》

ホテルをチェックアウトした研修団員は、バスにて35 航空団司令部庁舎に移動、ブリーフィングルームに入った。 ここから 35 航空団司令官デイビッドソン大佐自ら対応し ていただいた。内容は多岐にわたり、35 航空団の抑止力 としての位置づけ、米海軍及び航空自衛隊との連携に始ま り、三沢基地の戦略的位置や基地の状況、通常の訓練状況 などに触れつつ、部隊が帯びている任務を詳しく説明いた だいた。さらに地域との交流などにも触れ、最後は今後の 展望として、空自との相互運用性の向上や F-35 への機種 転換などが紹介された。説明後、研修団員から活発な質問

が寄せられたが、一つ一 つに丁寧に対応してい頂い

## 《F-16 戦闘機及び搭載装 備等見学》

司令部庁舎を後にして、 格納庫に移動した研修団員 は、F-16 戦闘機と搭載ウ エポンなどの説明を受け た、司令官自ら F-16 を説 明していただき、その他に も搭載兵器や関連機材等の 説明もあり、各人興味津々 で見入っていた。その後、 写真撮影をして格納庫を離 れた。



## 《昼食》

昼食は、小川原湖を見下ろすレイクビューグリル。デイ ビッドソン35航空団司令官にも同席いただき、3食目の アメリカン・フードであったが、とにかくボリュームがす ごく、各人まさに奮闘というところである。これで三沢研 修も終わりかとのそこはかとない寂しさが感じられた。

## 《解団式》

三沢基地空輸ターミナルに移動した研修団員は、搭乗手続きの後、池添三沢支部長と山本事務局長の見送りを受け、C-2輸送機に乗り込んだ。離陸するとしばらくして、サプライズでコックピット見学が許され、皆興味津々でコックピットに上がっていったのである。入間基地に着陸したC-2から研修団員が降機すると、目の前に特別塗装のC-1輸送機が駐機されていて、またもサプライズ。

退役前の最後の機体とのことで、皆夢中で写真に収めていた。

ターミナルでは、団長及び副団長は、特別室において中空司令官及び中警団司令との懇談後、2階において解団式を行った。引田理事が本研修を総括した後、倉持副団長、奥岡副団長そして小川団長のスピーチを受け、研修の締めくくりとした。

今回の研修では、空自及び米空軍から実に行き届いた配慮を頂いていることがひしひしと伝わってきた。改めて研修団にとって実に実り多い有意義な研修となったことを感謝申し上げたい。 (浅井理事記)







# 研修所感



## 法人賛助会員 株式会社 東芝 東 貴裕 様

令和7年2月4日から5日の2日間、JAAGA 主催の 米軍三沢基地研修が実施された。私は法人賛助会員の 一人として本研修に初めて参加した。米軍及び航空自 衛隊の方々の親切かつ誠意あるご協力により、普段は 聞くことができない話や、米軍、航空自衛隊及び日米 共用施設の見学もさせていただき、非常に勉強になる ことが多かった。また、日米各級司令官の方々や研修 に参加していた企業関係者の方々とも交流ができる貴 重な機会であった。

初日は航空自衛隊三沢研修であり、研修の実施場所である三沢基地までは、軍用機である C-130 で移動した。軍用機には初めて搭乗したため、離陸時及び飛行中の音や振動は非常に迫力があり、その凄さを全身で体験することができた。機内も民間機とはかなり異なっており、視界に入る全てが新鮮なものであった。研修参加者一同は各々機内の様子を写真に収めるなどして三沢基地までの空の旅を堪能した。

研修は、北部航空方面隊司令官の講話にはじまり、 北部航空方面隊の概要、我が国を取りまく安全保障環境、防衛省・自衛隊の取り組み、今後の主要な課題という大きく4つのトピックにフォーカスした概要説明を受けた。特に印象に残っているのは、我が国を取り巻く環境を認識し、国内のみならず海外の動向にも目を向けておくことの重要性についてである。現にロシアとウクライナの2か国間で戦争が起きてしまっている。その戦い方として、ドローンの利用など過去の戦闘方法と異なった戦いを見せていることがあり、パワーゲームを常に行い続けていることがあり、パワーゲームを常に行い続けていることから核兵器での恫喝が懸念される。そのため、身近な話ではないとフィルタをかけるのではなく、核や各国の情勢について目を向けるべきという話が非常に印象に残っている。

このような背景からも、我が国においては、より一層スタンドオフ防衛能力・統合防空ミサイル防衛能力の技術的強化及び各種装備品の持続性・強靭性強化が重視されていくのではないかと感じた。また、ロシ

ア極東地域におけるスクランブルへの対応の説明も受け、北部防空の要として最前線に立って任務を遂行されていることも改めて認識した。

講話後は、格納庫にて RQ-4B、F-35 及び E2-D の 3 機種の見学を行った。実機を見ながら各種機体の概要説明を受け、各種機体の技術力の高さや航空自衛隊としてのミッション等を知ることができ、普段は経験することができない貴重な時間を過ごした。

1日目の研修を終えて、夜は米軍及び航空自衛隊の 主要幹部を交えた夕食懇親会が実施された。夕食懇親 会では研修に参加されている方々と交流をさせていた だき、お互いに打ち解けながら親交を深めることがで きた。

2日目は、第35戦闘航空団司令部であるデイビッド司令官の講話にはじまり、スライド資料を用いて第35戦闘航空団司令部の位置づけから今後の展望、米軍三沢基地の概要まで幅広い観点での説明を受けた。

特に印象に残っているのは、航空自衛隊との相互運 用についてである。三沢基地は米軍と航空自衛隊の基 地が一体の基地であるため、共用施設や共同訓練を実 施するなど共存していることが、他の国内にある基地 との大きな違いであると感じた。例えば、共同訓練を 実施するにあたり、三沢基地の中心地区である滑走路 地区の損失が一番基地の運用に影響を与えてしまうた め、迅速かつ確実な修繕のために日米合同で訓練を実 施している。また、基地クラスターの一環である警護 訓練においても、基地内外の運用の早期再開を目的と した訓練を実施していることから、日々の取り組みが 有事の際にも迅速かつ確実な対応を行うことができる のだと感じた。同時に、日頃から米軍と航空自衛隊 で密に連携を取りながら訓練等に取り組み、手を取 り合いながら一体となって日々過ごしていることをよ り一層感じた。講話の中での気づきとしては、Attack to Defense というキーワードを用いて、第 35 戦闘航 空団の任務である「アメリカの国家安全保障上の利

益を守り(protect)、同盟国・パートナーを防衛し(Defense)、世界的な侵略を阻止し、要請に応じて戦いに勝利する(Attack)」と話をされた際に、米軍と日本とのでは視点や考え方の違いがあるように感じた。米軍としての一番の防衛は、敵を攻めて祖国を守ることであると謳っている一方で、日本は守って反撃するといった防空戦闘の考えを重んじているため、国としての思想や憲法による違いがこのようなキーワードに出てきているのではないかと感じた。

講話後は、第 35 戦闘航空団司令部が保有している 格納庫にて F-16 や各種訓練器材の見学と概要説明を受けた。格納庫においても第 35 戦闘航空団司令官のデ イビッドソン司令官自ら概要説明を実施いただき、米 軍としての思いや考えなど様々な視点で話を聞くこと ができ、非常に濃密な時間を過ごした。

2日間の研修を通じて、昨今の多種多様な脅威から 我が国を守るためには、迅速な展開や対応が今以上に 求められていること、また、安全保障を保つためには、 より一層日米の連携が不可欠になって来ると強く感じ た。そのため、私たち一人ひとりも国内のみならず外 に目を向け、我が国がどうすればよいかを安全保障の 観点含めて当事者意識を持ちながら、自分の意見を持 つことも大切だと感じた。加えて、地域住民を含めた 日米間の強固な友好関係を重んじる姿勢も印象的であ り、日米ともに地域と手を取り合いながらともに歩ん でいることを改めて認識することができた。本研修の 企画・実施に尽力いただきました関係者の皆様にこの 場を借りて御礼申し上げます。



## 法人賛助会員 日本電気株式会社 森田 三慈 様

10年に1度と言われるほどの大寒波に見舞われた2月上旬、天候とは裏腹に、心晴れやかに初めての三沢基地訪問で期待に胸を膨らませるなか、JAAGA三沢基地研修に参加させていただきました。

私事で大変恐縮ですが、新入社員として防衛産業に携 わり約 | 年、先ずはこのような貴重な機会を頂戴いたし ましたこと、ご関係者の皆様に深く感謝申し上げます。本 研修は2日間に渡り実施され、1日目はC-130輸送 機で入間基地から三沢基地へ飛行しました。三沢基地到 着後は、北空司令官殿、基地司令殿表敬と講話拝聴、 F-35、E-2、RQ-4Bといった機体の見学をいたしまし た。次いで2日目は、第35戦闘航空団司令官殿の講 話を拝聴し、格納庫にてF-16をはじめ米軍が保有する 機体や装備品の見学を行い、C-2 輸送機にて入間基地 へ帰着いたしました。 | 日目の北空司令官殿、基地司令 殿の講話では、我が国を取り巻く安全保障環境や三沢基 地および北部航空方面隊の歴史と防衛事業の必要性、加 えて今後の在り方についてご教示いただき、知識習得中 の当方にとって学びの多い非常に有意義な時間を過ごさせ ていただきました。2日目の第35戦闘航空団司令官殿の 講話においては、今後日米軍間での相互運用性の向上を 図るべく、機敏な作戦展開への取り組みと F-35 戦闘機 への移行ならびに F-16 戦闘機の管理体制を強化すべく、 航空自衛隊と米軍との間で常に連携を取り合うことにより、 国際秩序を守るため行動していく、という心強い説明が深 く印象に残り、日本の安全保障と国際社会の平和・安定 を実現に向け、日米間で良好な共存共栄の関係を維持す ることの重要性を学びました。加えて、F-35やF-16といっ た機体見学では、戦闘機やそれらに関連する装備品に実 際に触れながら見学することができました。間近で見る戦 闘機はやはり圧巻で、実物は写真よりもインパクトがありそ の迫力に圧倒されました。隊員の方々による説明では、ス テルス性など何となく聞き覚えのある言葉も、実際に目と 耳で見聞きしたことにより理解の深化を図ることができました。 さらに、夕食懇談会といったお食事の場では、三沢 基地でしか味わうことのできない、アメリカンな食材に舌鼓 を打ちつつ、研修参加者の皆様との意見交流を通じて親 交を深めることができ貴重なお話を伺うことができました。

本研修に参加させていただき、改めて官民それぞれの協力あってこそ、現在の日本の安全は保たれているということを実感いたしました。微力ながら日本の防衛の一端を担う一人として、誇りと責任を胸に、本研修における交流や経験を今後の業務に還元していくことで、より高いレベルで業務に従事できますよう努めて参りたく存じます。結びになりますが、お力添えをいただきましたご関係者の皆様には、改めて心より感謝申し上げます。

# 「進化するパートナーシップ」

在日米宇宙軍、航空自衛隊宇宙作戦群との相互運用性を強化

ティシャ・イェイツ大尉 Tisha J. YATES, Capt, USAF Director, 5AF PA

横田基地発 — 在日米宇宙軍 (U.S. Space Forces-Japan) は 2024 年 12 月 4 日、横田基地にて、日本国 内で運用する新たな部隊として発足しました。



Flag passing ceremony

支援するための高度な宇宙専門知識の必要性が高まったことを受け、米インド太平洋宇宙軍司令部によって 決定されました。

在日米宇宙軍の発足により、米インド太平洋宇宙軍司令部の指揮下で、日本国内における宇宙作戦の計画、統合、調整、遂行が可能となりました。この体制下で、日米のパートナーシップ協定を支え、日本の宇宙関係機関との連携の深化を図るとともに変化する地域課題へ対応し、「自由で開かれたインド太平洋」の実現を確かなものにします。

設立から6か月後の今、同部隊は航空自衛隊宇宙作 戦群との連携と協力を最重要事項とし、両国の宇宙運 用における相互運用性の向上に取り組んでいます。

「米国は、宇宙領域における国際的連携を、脅威を抑止し、必要であれば対処するための基盤と考えており、インド太平洋地域における日本とのパートナーシップは極めて重要です」と、在日米宇宙軍司令官ライアン・ラートン大佐(Col Ryan Laughton)は語り、また、「相互に協力し、システム間の相互運用性を構築し、宇宙運用を学び合い、現実的なシナリオで合同演習を行うことは、この地域における脅威に対抗する上で極めて重要です」と述べました。

在日米宇宙軍は、2025年2月に種子島宇宙センターで行われた準天頂衛星「みちびき6号(QZS-6)」の打ち上げを支援しました。この衛星には米国のペイロー

ドも搭載され、国家安全保障を目的とした日米共同の宇宙プロジェクトとして、宇宙領域における日米同盟の拡大を示すものとなりました。これは、「準天頂衛星システム搭載衛星プログラム(QZSS-HP)」における2回の打ち上げのうちの最初のものでした。

宇宙ベースの資産は、現代の防衛と安全保障において極めて重要な役割を果たします。衛星は、監視、偵察、ミサイル警報、通信といった重要な機能を提供しています。地域の安全保障上の懸念が高まる中、日本も宇宙分野の能力を強化し、潜在的な敵対勢力の抑止と国益を守る取り組みを進めています。

中国とロシアの両国は、米国およびその同盟国の衛星を脅威にさらす「対宇宙能力(counterspace capabilities)」を開発・配備しており、その進展スピードは加速しています。両国が開発している対衛星兵器(ASAT:Anti-Satellite Weapons)は、宇宙インフラに対する重大な脅威であり、在日米宇宙軍と航空自衛隊宇宙作戦群は、こうした脅威に対抗する防御手段と強靭性の確保に向けて緊密に連携し、「自由で開かれたインド太平洋」の維持に努めています。

このような前例のない時代において、日米同盟は進 化を続けており、宇宙分野における両国の連携は、相 互運用性の確保と「自由で開かれたインド太平洋」地 域の安定への強い意志を表しています。

「統合作戦司令部(JJOC)の創設は、統合環境下における指揮の統一・標準化に向けた大きな一歩です」と、ラートン大佐は語り、「在日米宇宙軍は、米国防総省及び米宇宙軍が宇宙の専門性、能力、信頼性をもって議論に加わり、日米同盟を構築していく上で極めて重要な存在です」と日本の宇宙作戦群との関係についてコメントしました。

在日米宇宙軍は、「キーン・ソード」「キーン・エッジ」「パシフィック・セントリー」といった日米共同演習に継続して参加し、日本のカウンターパートと相互運用力の強化と知識や技術の共有を図っています。

## SPORTEX24





## JAAGA members, Koku-Jieitai and USAF service members enjoy SPORTEX



桜の開花も間近となり、春本番のなか開催されると思われた「SPORTEX24」であったが、開催前日、都心にも雪が降り、多摩ヒルズゴルフコースは「積雪 6cm」となった。開催当日3月20日(木)、早朝5時前に理事2名が現地の状況を確認し、コースには一部雪や霜が残るものの晴天の

予報もありプレーは可能と 判断、スタート時間を30 分遅らせて開催されること となった。

本年度は、経費の高騰や 参加者数の減少により、こ



れまで年度2回開催されていたSPORTEXを年度1回に集約する形で初めて開催された。上ノ谷理事の継続的な各所への働き掛けと関係者間の綿密な調整に加え、1回の開催に集約されたこともあり、多くの腕自慢が集い、航空総隊司令官谷嶋正仁空将以下現役空自隊員33名、米5空軍司令官ステファンFジョスト中将(Lt Gen Stephen F. Jost, 5AF Commander)以下米空軍関係者16名、丸茂吉成会長以下JAAGA正会員及び賛助会員等35名、総勢84名のプレーヤーが参加した。加えて、正会員ボランティア4名が、プレーせずに、早朝のコース確認から始まり、受付、カート準備、開会式、スコア集計、表彰式に至るまで献



身的に行動し、 SPORTEX の 円滑な実施を支 えた。

開会式は、上ノ谷理事の軽妙

な司会により進められ、丸茂会長とジョスト司令官のユーモア溢れる挨拶により参加者の気勢は大いに上がった。集合写真の撮影後、参加者はカートに乗り込みパートナーと談笑しつつ、所々凍った場所や雪の残る場所などを確認しながら指定された各々のホールに向かった。7時30分のスタート・ホーンを合図に「ショットガン」形式で競技が開始され、雪をものともしない熱戦が繰り広げられた。

競技結果は、見事、鈴木康彦さん(正会員)が優勝(GRS 79 HDCP 10.8 NET 68.2)、丸茂会長から「屛風型写真立」が授与され、準優勝の石井さん(警備犬管理班長)(GRS 82 HDCP 13.2 NET 68.8)には「『富士に桜』の写真盾」が、第 3 位のジョンソンさん(Mr. Keith Johnson)(GRS 78 HDCP 8.4 NET 69.6)には「ゴルフタオルセット」が授与された。

昨年空自創設 70 周年を迎えたことから、今回は「70 位」に「空自 70 周年記念賞」が設定された。見事、杉谷さん(航空幕僚監部)が受賞し、「金箔ゴルフボール・ティーセット」が授与された。また「7」の倍数の順位の佐々木さん(第 2輸送航空隊)、大串さん(正会員)、窪田さん(航空総隊司令部)、福永さん(正会員)、三浦さん(航空総隊司令部)、若目田さん(個人賛助会員)、由迫さん(第 4 補給処)、幡生さん(入間管制隊長)、左腕を負傷しても参加したオカモトさん(Col Burt Okamoto, 374ALW)、高橋さん(正会員)10 名に荒木副会長から「飛び賞」が授与された。また、ブービー賞は伊藤さん(法人賛助会員)が受賞した。

「JAAGA 会長賞」には、令和6年能登半島地震からの復興を祈念した輪島塗「手彫り沈金」の2膳箸セットが用意され、丸茂会長から「SPORTEX を盛り上げた米側ブービー」

のバーネットさん(TSgt Matthew Barnette, 5AF)に授与された。

「5空軍司令官賞」は「SPORTEXを盛り上げたで賞」として、ジョスト司令官から川口さん(正会員)に「ウイスキー」が授与された。

また、谷嶋総隊司令官から、「空自賞」として、米軍3位のロフトンさん(Mrs. Yoko Lofton)、6位のライト中佐(Lt Col John Wright, 5AF)、9位のジョスト5空軍司令官、12位のオカモト大佐(Col Burt Okamoto, 374ALW: 左腕負傷も参加)、15位のバーネット2等軍曹(TSgt Matthew Barnette)に授与された。加えて、今回初めて「空自からの感謝賞」が SPORTEX ボランティアに贈呈された。

マックエルハニー 374 航空団司令官 (Col Richard McElhaney, 374ALW Commander) のユーモア溢れ溌溂とした締めの挨拶により SPORTEX24 はお開きとなった。

前回 SPORTEX 終了以降、上ノ谷理事を中心に関係理事が頭を突き合わせて各種の検討を行い、年度1回の開催に変更し、メールの活用の推進による業務の効率化、各所への啓蒙活動やグリーンミーティングを含む緊密な調整を行ってきた結果、SPORTEX24 は多くの参加者が集う素晴らしい日米交流の場となった。関係理事からは、多くの参加者が集い、楽しく友好を深められる機会としてSPORTEX の更なるバージョンアップを図っていくとの心強い言葉が寄せられた。

終わりに、ボランティアとして行事を支えた上ノ谷、西谷、大岩、村田の4名の理事、また毎回最良の環境を提供していただいている多摩ヒルズゴルフコースの関係者の皆様に改めて感謝を申し上げたい。 (太田理事記)





# 航空自衛隊コーナー

From Koku-Jieitai

1952年から始まった「クリスマス・ドロップ」(OCD: Operation Christmas Drop)は、12月のクリスマスの時期、ミクロネシア連邦とパラオ共和国の島々を巡って行われる物料投下訓練で、空自は2015年から参加している。投下される物資(生活用品等)は、米空軍と米国の慈善団体が中心となり集められた寄付物品であり、提供者、(子供たちも含む)ボランティア、訓練参加者が一緒に箱詰めを行

い、投下物資はそのまま援助として贈られる。指定された場所に、100mほどの低高度で進入・投下することから、物資を待ち受ける人々が手を振る姿に接することができ、単なる実戦的な物料投下訓練ではなく、サンタとなって「贈り物を届ける」という、「やりがい」のある訓練となっている。 (太田理事記)

## ミクロネシア等における人道支援・災害救援訓練(クリスマス・ドロップ)への参加

第401飛行隊長 2等空佐 新井 正太郎

空自は、令和6年12月4日(水)から12月17日(火)までの間、ミクロネシア連邦等において実施された人道支援・災害救援共同訓練(クリスマス・ドロップ)に参加しました。訓練はアメリカを中心に実施されており、日本のほかオーストラリア、カナダ及び韓国が参加しました。空自は、2013年からオブザーバーとして参加、2015年以降、輸送機 C-130Hにより参加しており、今回で10回目の参加となりました。本年の訓練には、第1輸送航空隊(小牧)から C-130H×1機、人員約20名が参加しました。

主な訓練内容は、各国と共同で実施する「物料梱包訓練」及び「物料投下訓練」です。特に、物料投下訓練に関しては、太平洋の広大な地域に分散している投下場所の中から割り当てられた投下場所に対し、空中から物料を投下する訓練で、訓練環境上の制約により国内では実施機会の少ない洋上への物料投下を訓練できる貴重な機会となっているほか、各国との共同訓練を通じて我々の人道支援・災害救援に係る各種能力の向上を図ることができる非常に重要な訓練です。

物料梱包訓練においては、参加国空軍及び現地ボラン

ティアと協力し、慈善活動を行う団体等から米空軍に提供された寄付品を梱包するとともに、災害救援物資の梱包要領に係る意見交換等を実施し、能力の向上を図りました。また、物料投下訓練では飛行経路、投下場所、投下要領、天候気象、その他運航に必要な事項等、最新の情報に基づいて飛行計画を作成し、物料投下に関する統制要領を遵守して安全確実に物料投下を完遂しました。加えて、各種訓練を通じて、参加国空軍人と防衛交流を実施し、相互理解の促進を図りました。

本訓練を通じてミクロネシア連邦等の太平洋島しょ国の各国に物資と笑顔を届けることで、理解と信頼を醸成するとともに、世界の平和と安定に深くコミットしていくという航空自衛隊の意思を示すことができました。加えて人道支援・災害救援に係る能力の向上、米空軍との相互運用性の向上及び参加国間の連携強化を図ることができました。JAAGAの皆様からは、訓練にあたり激励の品を頂戴し、訓練参加者の士気が上がりました。この場を借りて御礼の挨拶をさせていただきます。誠にありがとうございました。







All participants from KOKU-JIEITAI 70th Anniversary

Situation at the time of material drop Kids on the ground  $\leftarrow \rightarrow$  The crew on board

# 米空軍コーナー

From USAF

## PACAF 司令官、AFA シンポジウムで即応性と殺傷能力を強調

https://www.pacaf.af.mil/News/Article-Display/Article/4108278/pacaf-commander-highlights-readiness-lethality-at-afa-warfare-symposium/Article-Display/Articl

Air & Space Forces Association のシンポジウム「Agile Combat Employment Mindset」を議論するパネルでの太平洋空軍司令官の記事を紹介する。この中では、PACAF が重視する能力を説明する中で、ACE の重要性を上げ、レゾリュート・フォース・パシフィック(Resolute Force Pacific: REFORPAC)演習の重要性にも触れられている。 (浅井理事記)

太平洋空軍司令官 Gen Kevin Schneider は、2025 年 3 月 4 日に開催された Air & Space Forces Association のシンポジウムで、PACAF が重視する戦闘の効果、殺傷能力、即応

性を強調した。

Gen Kevin Schneider は、先 任上級曹長 Chief Master Sgt Kathleen McCool、在ヨー ロッパ米空軍・



アフリカ空軍(USAFE-AFAFRICA)司令官の Gen James Hecker、同先任上級曹長 Chief Master Sgt Randy Kwiatkowski とともに、「ACE(Agile Combat Employment:迅速機敏な 戦闘展開)マインド」について議論するパネルに参加した。上級指導者たちは、ACE、インフラ復旧能力、統合相互運 用性について議論し、紛争下における空軍の戦闘能力の強 化に焦点を当てた。

「安全な基地で活動する時代は終わった。インド太平洋の 広大な距離と進化する脅威は、紛争状況下で分散した場所 から運用できる柔軟で弾力性のある部隊を要求している」。

Schneider 司令官は、戦闘における航空戦力の発揮と維持の重要性を強調し、PACAFの強化されたインフラと分散基地へのコミットメントを強調した。「空軍は、ACEのためにインド太平洋に分散した活動拠点を配置したいと考えているが、主要な活動拠点での弾力性のあるインフラにも多額の投資をする必要がある」と彼は説明した。「生存能力を維持しながら、戦闘力を発揮し、投射する能力のバランスをとることだ」Schneider 司令官は、殺傷力と持続的な作戦を確保するために、ロジスティクスが重要な要素であると強調した。「安定したロジスティクスを想定することはできない。私たちは、過酷な状況、劣化したネットワーク等に備える必要がある」と述べた。

これらの優先事項を強化するために計画されている重要なイニシアティブは、レゾリュート・フォース・パシフィック(Resolute Force Pacific:REFORPAC)、2025 年夏に行わ

れる重要な演習である。この演習では、ACEの概念、戦闘下でのロジスティクス、複数の場所から戦闘力を生み出す能力が強調され、米軍が実戦で効果的に活動できるようにするものである。Schneider司令官は、「われわれは、これまでなかった方法で、迅速に移動し、戦闘を維持する訓練をしている」と語った。インフラやロジスティクスに加えて、同盟国との相互運用性も、インド太平洋地域において重要であり、この地域全体で日々培われている重要な側面である。「同盟国やパートナーを味方につけることは大きなメリットだが、全体的な有効性を高めるために克服しなければならない独自の課題も生まれる」と Schneider 司令官は言う。また、日本、オーストラリア、韓国、フィリピンなどのパートナーとの統合と作戦上の連携が進んでいる証拠として、REFORPAC のような合同演習や実際の作戦を挙げた。

Chief Master Sgt. McCool もまた、ACE を成功させるうえで Airmen が重要な役割を担っていることを強調するとともに、運用可能な Airmen の訓練がいかにプレッシャーのかかる実戦環境で行われているかを強調した。「ACE のマインド作りの一環として、Airmen は自分の専門外の仕事をし、クロスファンクショナル・チームとして訓練する必要がある」とも述べた。

Schneider 司令官は、昨年横田で開催されたマルチ・キャパブル・エアマン・ロデオ (Multi-Capable Airman Rodeo) を例に挙げ、展開し独立で活動することを Airmen がどのように学んでいるかを説明した。

Schneider 司令官は最後に、PACAFが戦いの有効性を高め、 侵略を抑止し、争いの中で力を発揮する態勢を確保することに重点をおいていることを示し、「どのような紛争環境 でも戦い、勝利する我々の能力は、攻撃を受けている間に 出撃し、戦闘作戦を遂行する能力にかかっている。我々は 演習のために準備しているのではない。我々は勝たなけれ ばならない。準備万端でなければならない」と述べた。

(浅井理事仮訳)

動画等:https://www.afa.org/agenda/the-ace-mindset/

## Local Topics

在日米空軍 / 5 空軍 横田基地 USFJ / 5th AF at Yokota AB on Dec 14 '24

在日米軍兼第5空軍「日米ホリデーレセプション」が、令和6年12月14日(土)18時よりニューサンノー米軍センターにおいて開催された。米側からは在日米軍司令官兼5空軍司令官ジョスト中将(Lt Gen. Stephen F. Jost is the Commander, United States Forces, Japan, and Commander, Fifth Air Force) ご夫妻、在日米軍副司令官ジョージ B. ラウル4世海兵隊少将(Maj Gen George B. Raul IV, USFJ Deputy Commander)及び米軍関係者、自衛隊側から統合幕僚長吉田陸将、航空幕僚長内倉空将、航空幕僚副長小笠原空将、航空支援集団司令官森田空将、航空開発実験集団司令官小島空将、空自補給本部長坂本空将、



情報本部長尾崎空将、防衛装備庁装備官坂梨空将、航空幕 僚監部運用支援・情報部長尾山空将補、航空救難団司令佐 藤空将補、航空戦術教導団司令富川空将補など、JAAGA か らは丸茂会長夫妻、前原副会長、井筒副会長夫妻、武藤理 事長夫妻、岩崎理事、藤田理事、池田理事が参加した。

ジョスト司令官は冒頭のスピーチにおいて「世界は力が強いがゆえに平和が保たれていますが、強さを維持する努力もしなくてはならない」と述べられ、最後のスピーチでは26年前に奥様にプロポーズした話も交えて和やかにスピーチされ、「ホリデーシーズンは寒い。外は寒いが家の中は暖かい。暖かいのは暖房のお陰だけではなくて人の温かさや交流の温もりによるものも大きい。今日はそのような温かい時間を過ごしたこと、新たな友情を交わしたことが大変嬉しく、こういった繋がりが日米の強い繋がりになっていくものと確信しています」と述べられた。

会場は米軍バンドによるクリスマスソングの演奏が続けられ、大きなクリスマスツリーにリースなどが装飾されクリスマステーストのレセプションが盛り上がり、その中で日米関係者はお互いに親交を深め友情を培っていた。 (池田理事記)

第 374 空輸航空団 横田基地 374th AW at Yokota AB on Jan 25 '25



令和7年1月 25日、恒例の横 田基地及び周辺7 クラブ共催による 「友好クラブ新年 会」が、横田基地 下士官クラブで盛

大に開催された。本会には、周辺自治体はじめ防衛省関係 者等が招待され、JAAGAからは井筒副会長、藤田理事、岩 﨑理事の3名が参加した。

7クラブとは結成34年目を迎える福生・横田交流クラブを筆頭に、あきる野、瑞穂、羽村、武蔵村山、青梅、昭島の7つの交流クラブから構成され、各クラブは日頃から基地所在部隊の隊員やその家族と、餅つき、バーベキュー、野球観戦などのイベントを通じ家族ぐるみの交流活動を続けている。

開会に先立ち、厳かな雰囲気の中、儀じょう隊による日 米両国の国旗入場及び国歌独唱が行われた。その後、横田 基地司令官の第 374 空輸航空団司令官リチャード・マッ クエルハニー大佐(Col Richard F. McElhaney)が、新年 の挨拶を行い「この新年に友人の皆さんとの絆をさらに深 めたい」と述べた。

また、昨年末に着任したばかりの作戦システム運用隊司令兼空自横田基地司令の細川1佐も挨拶で「着任以来、米軍関係者や地域の皆さんに温かく迎えられ、多くの支援を受けていることを実感している。これからも米軍関係者や地域の皆さんとともに歩めるよう精一杯頑張りたい」と語った。

その後、主催者代表の瑞穂横田交流協会会長や来賓代表

の瑞穂町長挨拶と続き, 各クラブ代表と基地司令 官による鏡開きが行われ 歓談が始まると会場内は 一気に和やかな雰囲気に 包まれた。



会の中盤、瑞穂町の無形民俗文化財の「祭り囃子」が高 根囃子保存会により披露されると、会場は一層の盛り上が りを見せた。最後は羽村・横田友好クラブ会長及び第515 航空機動運用群司令官トリッグ・ランドル大佐 (Col Trigg E.Randall) の音頭で手締めが行われ、新年会の幕は閉じた。

(岩﨑理事記事)

第374空輸航空団 横田基地 374th AW at Yokota AB on Nov 23 '24

令和6年11月23日(土曜日)午後1時から横田基地 内将校クラブにおいて第374空輸航空団司令官リチャー ド・F・マックエルハニー大佐 (Col Richard F. Mcelhaney, Commander of Yokota AB) 夫妻主催によるホリデー・ソー シャルが開催された。ドレスコードは、フェスティブ/ス マートカジュアルと指定され、各参加者は楽しい午後の ひと時を過ごした。ご招待により JAAGA から川口、村田、 朝倉理事、石川会員が参加させて頂いた。7月に横田基地 司令官として着任したマックエルハニー大佐より主催者挨 拶として「ホリデーは人と人との結びつきという価値観を 共有する大切な時間です。今日の自分を支えてくれた周り の全ての人に感謝する機会、そしてこのようなつながりは、 共生、思いやり、感謝を通じて真の団結をもたらします。 このホリデーシーズンに自分の大切な人に感謝する時間を 作ってはいかがでしょうか。」と挨拶された。今年も特別 ゲストとして基地内のバレエ教室に通う小さなプリマたち が迎えられ、可愛いくるみ割り人形のバレエ演技がホリ デー・ソーシャルに花を添えた。マックエルハニー大佐ご 夫妻はプリマたちに赤い花を手渡し素敵なダンスに感謝を 述べられた。基地周辺地域の市長、市議会議長をはじめ多 くの招待者と基地関係者とのパーティ形式での再会を通じ て、地域との交流が日米間の強固な団結のためには重要で あることを実感した。 (朝倉理事記)

浦総隊副司令官をはじめ、航空総隊主要幹部、近隣部隊長、 細川横田基地司令等が、JAAGA からは前原、井筒副会長、 加藤理事夫妻及び藤田、村田渉外理事並びに北村会員が参 加した。北村会員は、米空軍交換幹部当時、マックエルハ ニー大佐と同じ飛行隊に勤務したことから特別ゲストして 参加した。

レセプションは、マックエルハニー大佐の出迎えから始 まり、約1時間、参加者間で懇談し日米間の交流を図った。 また、最後にマックエルハニー大佐は、横田基地日米友好 祭への参加、日頃からの支援に対して謝意を述べるととも に、「横田基地は引き続き地域との共存共栄を図るととも に、友好祭を通じ基地の使命や文化を日本の方々に知って いただく機会としたい。」と挨拶を行った。

レセプションが終わる頃には、雨も止み、参加者全員で DV ラウンジ前で記念撮影を行い、会を締めくくった。

エプロン地区の航空機展示では、横田基地所属の C-130 等の輸送機のほか、F-16、CV-22、C-17等の米軍航空機に 加えて、陸自、海自及民間団体等の多数の航空機が展示さ れた。また、航空機展示や展示飛行の他、屋内ステージや 格納庫ステージでの音楽演奏や各種パフォーマンスなど多 種多様なイベントが行われ友好祭の盛り上げに一役買って いた。

友好祭は、朝からの雨のため、例年に比べると来場者は やや少なめの状況だったが、天候の回復とともに、来場者 数も増加し大いに楽しみ賑わいのある友好祭となった。

(加藤理事記)



2025 横田基地日米友好祭 Yokota AB opens door for Festival

2025横田基地日米友好祭が、5月17日(土)及び 18日(日)の両日開催され、5月17日(土)午後1時 から、米空軍横田基地司令官マックエルハニー大佐(Col Richard F. McElhaney, Commander of Yokota AB) 主催の 祝賀レセプションが DV ラウンジにおいて実施された。周 辺自治体、協力団体、官公署の長等とともに、空自から影





作:字山 OB

第 18 航空団 嘉手納基地 18th Wing at Kadena AB on Nov 16 '24

令和6年11月16日(土)嘉手納基地内カデナハイスクー

ルにおいて、「カデナスペシャルオリンピクス (KSO)2024」が開催された。KSOは、2000年の第1回目の開始から年々その規模を拡大して行われ、沖縄県内の



支援学校等から多い年には 1000 名以上のアスリートがエントリーした。参加アスリートのご家族や米軍ボランティア、地域ボランティア、陸海空自衛隊のボランティアを合わせると数千名以上が参加するマンモス大会として 2017年の第 18 回大会まで連続して行われていた。その後、6年間のブランクをおき昨年規模を縮小しながらも、嘉手納基地周辺市町村の支援学校のアスリートに限定して第 19回大会を開催していた。第 20回目の節目となった今年の大会は、朝から降り続いていた雨も開会式が始まるとともに止み、時折日差しがさす絶好の天候の中、フィールドや屋内において多くの競技が行われた。

KSO 開催に当たり、主催者である第 18 航空団司令官エヴァンス准将(Brig Gen Nicholas B. Evans,Commander of 18th Wing, Kadena AB)から参加するアスリート、大会を運営するボランティアに対して、KSO が嘉手納基地におけ

る日米交流の発展の場となる事を嬉しく思うとともに、この大会において多くの思い出を作り上げてほしいと挨拶されていた。

大会には、沖縄県の照屋副知事をはじめ、外務省沖縄事 務所宮川大使、沖縄防衛局伊藤局長の他、當山嘉手納町長、

渡久地北谷町長等の周辺 自治体関係者が来賓とし て参加されていた。

今年度は、昨年度再開 された情報をもとに、過 去10回以上通訳ボラン



ティアやテントモニターとして参加した沖縄支部相原事務局長が、KSO ボランティア総括の狩俣ちえみさんとの密接な連携のもと、KSO Official Sponsors として寄付金贈呈を行うと共に、通訳ボランティアや給食支援に当たった那覇基地准曹会員や多くの若い空自隊員への激励を行った。

本大会のボランティアとして参加した多くの空自隊員たちは、ハンディキャップを持ったアスリート達の競技に対する純朴な参加姿勢に触れ、バディとなって一緒に熱く応援した米軍ハガーボランティアとの交流を通じ、短い時間ではあったが大変良い思い出を作っていた。また、担当したアスリートや米軍ボランティアとの再会を約束し、引き



続き来年度もボランティアとして参加したいと感想を述べていた。

(相原沖縄事務局長記)

## 投稿募集のご案内

日米エアフォース友好協会(JAAGA)は、お陰様で令和8年7月で創立30周年を迎えます。日米同盟の深化進展に伴い、日米両軍の絆はより強固なものに発展してまいりました。「JAAGAだより」も、JAAGA活動の広報と空自、米空軍のサポーターとしての役割を、より一層充実発展させていきたいと考えています。

ご愛読の皆様(会員に限らず現役隊員の皆様)からの投稿は大歓迎です。また、皆様の忌憚のないご意見や ご感想も是非お寄せいただきたくお待ちしています。

【連絡先】(郵便) 〒 160-0002 東京都新宿区四谷坂町 9 番 7 号

ZEEKS 四谷坂町ビル 3F

日米エアフォース友好協会 広報係

(メール) jaagaKH222@outlook.jp

## JAAGA グッズの紹介

日米現役の皆さんを応援する「JAAGA だより」を更に多様性に富んだ充実したものにするために、会員の皆様の投稿を募集しています。投稿頂いた方には記念として、「JAAGA グッズ」(男性にはタイピン、女性にはピンブローチ)を謹呈させていただきます。

JAAGA 広報係

# 令和7年度JAAGA事業計画

	令 和 7 年 度 J A A G A 事 業 計 画					
		1/四	2/四	3/四	4/四	
	事業項目/実施時期	4 5 6	7 8 9	10 11 12	1 2 3	
	日米共同訓練等参加隊員の激励	その他	也の2国間・多国間共	司訓練	<b>コープ・ノース</b>	
日米隊員の激励等	日米優秀隊員の表彰(JAAGA AWARD 2025)				<del></del>	
	日米隊員の交流活動等激励	<del></del>				
米空軍軍人の日本研	防大留学米空軍士官学校学生の研修支援		<del></del>	$\longrightarrow$		
修等支援	スペシャル・オリンピックスの支援			横田、三沢、嘉手納 ◆		
	SPORTEX25			] 	<b>←</b>	
	指揮官交代行事等への出席	<del></del>				
JAAGAと航空自衛隊・	訪米事業		⇒訪米	成果等	報告会	
米空軍との交流	在日米空軍各基地との連携の強化					
	米空軍慶弔への対応	<del></del>				
	関係団体との交流(JANAFA、横田基地7クラブ)	JANAFA		JANAFA	横田基地7クラブ	
	日米要人等の講演	第5空軍副司令官 5/13		つばさ会	JAAGA合同講演会	
広報及び広報協力	米空軍基地等の研修			横田 <b>◆</b>	嘉手納 ◀────	
近戦及び近戦勝力	日米安保等に関する広報活動(米空軍広報記事の会報掲載)	<b>†</b>		<b>†</b>		
	会報の発行、配布	<b>+</b>		<b>+</b>		
	一般広報(HP運営、パンフレット作成、グッズ贈呈)	<b>——</b>		T		
総会		5/13				
	会勢拡大等(会員管理、会勢拡大)	<del></del>			<b>_</b>	
	支部との連携	<del></del>				
運営管理	事務所の運営と備品等の整備	<del>-</del>				
建名官理	会員名簿の作成、配布			<b></b>		
	役員会(★)及び理事会(☆)	☆ ☆ ★	<b>☆</b> ★	<b>☆</b> ★	☆ ★	
	会計監査	(R8. 4)				
その他	創立30周年(令和8年)記念行事のための経費積立	<del></del>				

## 令和7年度JAAGA役員

職名		氏 名	(青:新任)	
会 長		丸茂吉成		
副	会長	前原弘昭、荒木淳一、井筒俊司		
監	事	小野賀三、深澤英一郎		
	理事長	武藤茂樹		
	副理事長	増子 豊		
	企画	山田真史、上ノ谷 寛、引田 淳、菊田 哲		
理事	総務	金古真一、井上浩秀、長田国男、山倉幸也(兼)、荒木哲哉、島津貴治、西谷浩一、 伊藤 顕		
7. 7	涉外	岩崎仁彦、川口泰志郎、藤田信之、村田圭史、朝倉譲、川波清明、加藤史彦		
	会員	今瀬信之、西村弘文、山倉幸也、野澤隆一		
	広報	浅井玲、池田五十二、太田徹、菅原政弘		
	財務	平元和哉、大岩卓弥、宮本裕徳、上境賢己		
士加尔耳	支部長	池添孝史 (三沢)	丸野礼治(沖縄)	
支部役員	支部事務局長	山本親男(三沢)	相原弘介(沖縄)	

## 退任役員

※これまでのご支援ありがとうございました。

役 職	氏 名	役 職	氏 名	役 職	氏 名
顧問	岩崎 茂、小野田治、山崎 剛美	顧問	平田 英彦、石野 次男、福井 正明、清藤 勝則	理事	深瀬 尚久、三谷 直人、 高橋 秀雄

## 新入会員紹介

## 正会員(7名)

氏 名	住 所	氏 名	住 所	氏 名	住 所
伊藤 顕	東京都国分寺市	甲斐修	東京都町田市	鈴木 康彦	埼玉県入間市
尾崎 義典	東京都世田谷区	後藤 雅人	東京都新宿区	井上 伸康	埼玉県朝霞市
今福 博文	神奈川県相模原市				

## 個人賛助会員(8名)

森谷 志郎	東京都世田谷区	蛯名 忠親	横浜市青葉区	池田 清光	東京都品川区
原 千明	東京都町田市	大倉 健	東京都港区	松浦 良成	神奈川県横須賀市
谷田貝 義幸	栃木県宇都宮市	広中 真人	東京都大田区		

## 法人賛助会員(2社)

法人名	住 所	代表者	法人名	住 所	代表者
株式会社アイテック	静岡県静岡市	大畑 大輔	BAE Systems Japan	東京都港区	Rob Peer

## 賛助会員の皆様へ

日頃から JAAGA 設立の趣旨に賛同され当会の活動にご協力いただき、ありがとうございます。三沢基地、 横田基地、嘉手納基地の研修に参加された賛助会員の皆様には、当方から所感文の寄稿をお願いし、研修の意 義のみならず JAAGA の多様性をも噛みしめられるような味わい深い所感を頂戴しているところです。

このような寄稿に加えて、法人、団体、個人の賛助会員の皆様からの投稿も、幅広く募集しております。 テーマは自由、1 件につき JAAGA だより 1 ページ以内程度( $400 \sim 2,000$  字程度)、写真、図表等を含めていただいても結構です。細部要領等は広報係からご連絡いたします。

JAAGA 入会に至った経緯、企業・団体の概要、個人の活動等の概要、JAAGA に対する要望、航空自衛隊・ 米空軍に対する貢献活動等、日米現役隊員に対する期待・激励等、思うところを自由にお書きください。

賛助会員の皆様の積極的な投稿を、お待ちしています!

## 【法人会員の皆様】31社

株式会社 IHI、株式会社アイ・テック、株式会社石橋オフィスサポート、伊藤忠商事株式会社、株式会社エクシオテック、川崎重工業株式会社、株式会社シー・キューブド・アイ・システムズ、株式会社 SUBARU、住友商事株式会社、双信商事株式会社、双日株式会社、東京航空計器株式会社、株式会社東芝、日本電気株式会社、日本飛行機株式会社、ノースロップ・グラマン・ジャパン、BAE Systems Japan 合同会社、藤倉航装株式会社、富士通株式会社、株式会社フジワラ、渕上建設工業株式会社、Boeing Japan 株式会社、丸一土地建物株式会社、丸紅エアロスペース株式会社、三菱重工業株式会社、三菱商事株式会社、三菱商事マシナリ株式会社、三菱電機株式会社、三菱プレシジョン株式会社、株式会社武蔵富装、ロッキードマーティングローバルインコーポレーテッド

【団体賛助会員の皆様】2団体

ハイフライト友の会、三沢市防衛協会

【個人賛助会員の皆様】115名

## 会員募集

- 今期は、関係各位のご努力で、新たに正会員7名、個人賛助会員8名、法人賛助会員2社の合計17名(社)の入会を得ることができました。
- 令和7年5月15日現在、正会員数247名、個人賛助会員数115名、団体賛助会員数2団体、法人賛助会員数31社となっております。
- 今後とも、会員の皆様の勧誘、推薦、情報提供に関するご協力、ご支援を是非とも宜しくお願い致します。 なお、本会への入会につきましては、次のとおりです。

推薦、若しくは、情報提供を頂いた方には直接会員担当理事から連絡させていただきます。

## 【入会資格】

正 会 員:航空自衛隊のOB

賛助会員:航空自衛隊のOB以外の方。正会員3名の推薦が必要です。

【連絡先】

郵 便:〒160-0002

東京都新宿区四谷坂町 9-7 ZEEKS 四谷坂町ビル 3F

\_\_\_\_\_

## 編集後記

- ◇編集作業(編集長 I)◆今号は、米軍との演習内容の組み替えや日程変更で項目をかなり減らしましたが、各項目の内容を充実させて、JAAGA アワード受賞者の特集を組んで、写真を大きくして・・、気付いてみたら前号よりページが増えてしまいました。楽しまれていたら幸甚です。今後もご支援よろしくお願い致します。
- ◆梅雨も後半になってきました。今年は大きな水害等がないことを祈るばかりです。また、熱中症予防が声高に聞こえてきます。十分注意しましょう。(A)
- ◆航空自衛隊幹部学校米交換幹部のキース中佐の日本 文化に対する敬意と吸収しようとする熱意に感動しま した。これからもこういった交流を大切にしていきた いですね。(Ⅰ)
- ◆「四季」が夏と冬の「二季」になりつつあるのでしょうか。美しい秋を期待しつつ、体調を整えて暑い夏を乗り切りましょう! (0)
- ◆8年弱続いた黒潮大蛇行が終息し通常の流れに戻りつつあるとのこと。ここ数年の国際情勢の大きなうねりも早く平穏になってほしい。(S)



編集担当(広報理事):浅井玲、池田五十二、太田徹、菅原政弘

JAAGA だよりは、ホームページからもご覧いただけます。

(JAAGA ホームページ: http://www.jaaga.jp/)